富士のよせ書　一

能面生
馬骨生編

WB12
22

915.
I488h
準貴

帝國圖書館藏

ガラス使用

引用書目
駿州名勝志
駿河国志
東鑑
泊洒筆話
著作堂一夕話
伊勢物語
十六夜日記
宗長手記

甲斐叢記
富士洞窟紀行
塩尻
玄同放言
更科日記
海道紀（光行　貞応二年）
廿房艶語会

WB 12
22

ガラス使用

春の深山路
富士御覽日記　宗長　永享四年
富士紀行　雅世　永享四年
吾妻の道の記　勝俊
正廣日記
窓の曙　似雲
東乃道の記　尊海
関東道の記　烏丸光栄
長明道記
東の道の記　実晴母
東国紀行　宗牧

室町殿伊勢参宮記
富士紀行　堯孝
関東海道記　雅康
東の道記　光廣
東下記　宗隆
東関記　沢庵
難波紀行　京極長高
東海道の記　小堀政一
身延道の記　元政
西国雜記
富士紀行　紹巴

答秋成文　宇万伎
将軍御参宮紀行　堯孝
東国陣道記　藤孝
西国記　宗祇
富士詣　三千風
雁うね日記
所歴日記
木曽路の記
東富士紀行
紫の一本

道ゆきぶり　貞世
北国紀行　堯恵　文明十七年
東国紀行　飯通
丙辰紀行
駅路の鈴
旅日記　馬琴
東海道名所記
白雲日記
平安紀行　持賀

○駿州名勝志

富士山　富士郡

富士は駿甲相の三州に跨る今富士郡（山の峯の半は）都良香の記に山名富士取郡名也とあるに拠れり竹取物語に赫夜姫の帝に奉れる不死の薬を此山にて焼かせけるより不死山とは名付けるといへと信するに足らす又俗説に孝安の御時はしめて現せりなといふは尤も妄誕の言なるへし或人の説に天地の分れし時よりありといふ都氏の取郡名といふ説正とすへし又富士は国中の鎮る所山中幽間ろそらふくきしなき山も水も記すへき事多されは此集の[illegible]にあらされはもらしぬ

ガラス使用

（歌詞にあれハ歌の部にあれバはぶく）

然るに記に貞觀十七年冬の比白衣の美女なるを二人山の頂に
ならびまふを都良香の富士の記に書きたりいかなる故にか覚束
なし

此郡多く蚕を業とし絹を出す甲斐に文化五年十一月繭会
の作年より絹手形を出す此国にも是非(?)の御絹あるといへり

明見

梅道沢袖中抄に明見は富士の麓にありといへり　按に此所に
志ろ此池清く流れ池の中に地二つありされども鴨津と云也

すとあれは都氏の説に甑有神池又甑中常有気蒸出其親
其甑底如湯沸騰其在遠望者常見烟火と甑底とは絶頂
の平坦なる所の真中にすりきのごとく窪はりたる所あり古人は其下に神
池ありて水気と火気と相射て噴煙と立のぼる是を噴煙
といふ後に酒ありて崖崩れ落ちて池をうづめしけるにや貴
えし今はみずれ此山は烟たちすとかはりされども此山より以前に登りて
遊覧せし人今もいきよ間より水気の如く烟立のぼる處所
ありといへは

古来物に五条三位入道の家集にしまさざれど富士の煙
をなぐさとよみて為家の大臣と人にとひたまひしはいかに

嶺の道根にてなん侍りしといへ 又深坂峠に一説に云ふ 鳴沢なれ
なるさはと言なり なるさはとは富士の山よりいさごなるとあり 其鳴る音を
鳴沙と云ふ 但此乃山に白沙掛段へながれ下る事は一定なり 人これ
聞につれていさごくだりて一所の間にあるを云 或人云鳴沢は讃
ミ村の沢を云と又云 駿東郡須山村和田の間に鳴沢と云所あり
是をいふと皆用ゆべからず 八雲抄に高嶺の鳴沢といへり 流れて
音たえぬにより鳴沢と云と 方角抄に云ふ 河の鳴沢とは絶頂
にハ業を沼の如くすさまじく燒ありに峯くハ崩りと鳴沢は是を
の沢を云ふにあれ

山深の雲あさきの水なるとは雪咲かずの花なるなり　深武真

師歯迫山

即せ之山なり せハ助字なるべし 富士河せ之川を瀬（セヽ）川といふが如
八雲抄にはしはせ山とあり 是も又助字なり 語ハその字の訛也
藻坂峠にはしはすの歌を志も重山とし信濃とも誤
なるへし 或人の説に世之勢山ハ杉舊山なりとすれとさらにしらすな
万葉　荒熊（アラクマ）之住（スムテウ）云山之師歯迫山責而雖問（トウトモ）汝名（ナカナト）者不告（ツゲジ）
思ふ事なほおそれんいのちあやふく侍の志まる世の山をいくさかゆ

富士社

大宮浅間神祠なり 三代実録云 駿河国富士郡正三位浅間大明
神と此社をいふなるべし 神祠のかたはらよりいつる泉あり 此説

ガラス使用

川と云ふ又湧玉ヶ池と云ふ下流は潤川と云ふ小泉溪に至りて海に入

平番時

千早ふる神代の月乃清きぬれをみなもと川にかゝりけり

平兼豊

ほかふべき山はたおもひ人の渡るなる浅川乃影こゝろしく見

芝川

三河穂れ宮前にて川を後川と称る芝山を後山と作る風土記に
是瀬川とも源は猪原村の上より出て下流は富士川に入る此川より
水苔を出す富士のりと云ひ芝川のりを称まして貢
奉る土地なり

伝眼怀全

底清く行水に月さえてけりしのぶべき如寸の芝川

源氏美

言祝ぐ情ぬ宿をも待す人月さみさゆる富士の芝川

○富士川

信濃より流れ出て甲斐の国にて釜無川笛吹川など称
会ひ大河となりぬ駿河国の急流なり此より南に流れ海に入る

従二位家隆

朝日さす富士の高ねのみ雪をも空晴れてなかるゝはけふの富士の川なみ

入道二品親王性助

雪はれて富士のねは空にあらはれて山にたぎるゝ富士の川なり

佐古淳もとまま

峯はなほ光増るとは成る富士川の瀬をきしらう絶せぬ身をぞ有りつらふ

鴨長明

音にきゝし今ぞ富士の山の見ゆるとて或人富士川の間にて

富士沼

吉原と原の間北の方に東西一里ばかりの沼地なり　吾鑑に治承四年平軍富士川の西岸に陣せり夜富士沼に群がりゐる水鳥の羽音を官兵の来るとおどろき敗走せしと記せり　富士沼はすべて広く葦の茂りなり　富士川も今の所より東の方へ流れしといふ　海道紀行に平氏の羽音に驚きて逃去し富士沼

のちまでも今の浮島原はその所なりと

海道記云　浮嶋が原を過れば北は富士の麓にて東西へはるかに長き沼あり布をひけるが如し山のみどりかげをうつして空も水もひとつなり　芦かり小舟所々に棹さしてむれたる鳥おほく去来す雲の波煙の波いと深きながめなり眺望は心とりぬ心ぞし

かげひたす沼の入江に富士の嶺の
煙も空に浮島が原

鴨長明

其竹はかりふせる成なりけり
川のほとりに駒やとめまし

源仲遠

浮嶋か原

今の原及浮嶋か原なり広くて原より吉原まてあり近浮島か原なりとし此島道古人も藻原の地にて浮嶋か原柳原吉原蒲原なとの名有柳も吉原か蒲原を三宿と総て原よしかの間郷あまりの間に小林丘に堆あり此島道の出地状有桃原は一面にうき立て我上此桝所を見すいへより於見えや浮嶋の名ありみちて北浮嶋と内目の浅なるに悔通記にいつきし浮るを過れば外浮嶋とききしされと浮きとに佛中といええし所雅と見つ留竹林あり云々此哲へり有し成事

吹おろすふしの高ねの秋風に
袖もなれそふうき嶋か原

前参議俊光

時しらぬ山の雪けの雲晴て
あり明の月乃うきしまかの原

順性院

雲の浪たちそふ峰のはてしなみ
空もなれ浪なかにつきし嶋か原

従二位行能

海まつるこえまかふ浪のうへに
たゝよふ月のうき嶋か原

正三位知家

ふしのねの煙をうけてあく浦の
出えしあとしに浮嶋か原

安嘉門院四条

東路や小川路のまへ吹はらけし
よそに煙は立きも浮嶋か原

業庭　朝臣

何つまぢを雲に打出て見渡せは
浪にたゝよふうき嶋か原

法橋　顕昭

○甲斐叢記

冨士山

此山たくひなき高嶺にて世の人の能く知る所なれは煩はしく記すに及はす唯其あらかたの所の梗概を挙るのみ世を古より駿河の物と宗して万葉集山部赤人大（代）国史又都良香富士記にも皆駿河の山と記せるは山の表のむきなる方にて言ふなるへし地理にて言へは山の東南に就故より西北裂石まで裾野十三里の間は皆甲斐の地なり故に天正十年勝頼朝臣祈願文に日本有山名富士雖跨三州過半在甲州之山也といひ又峡中紀行に載籍以来以山隷駿為首蓋取諸海東瞻仰之有在也其實則山之在本州者六之三駿為二豆為一古人因其是歟

甲斐叢記

可以痛根など云ふは本邦の柳樹を云ふなり愉性を謂とこそ云ふべし然と又三国に跨ると云ふは古より諸書にて物へるを誤り伝へたるなりそは上に云ひし如く栗東の説なれば西北列なれる山の林麓を甲駿の二国をも環抱し伊豆の國へは係らざるにて知るべし且万葉集に高橋蟲麿詠める不尽山歌にも甲駿二国のみに跨ると云ひ又夫木集光俊朝臣の歌に「ちらと云ふしかなひも厭ず此中に生て胸に見えぬる山はふじの根」又詠人不知「吾下此山ひとつあるものと思ひしにかひにもありてふ駿河にもあるてふ」など見ゆ然れ後の世よりの言初めけん三国に係るもそ詩歌などにもおびただしくあれば今更言ひ解きがたし此山南口を表とし北口を裏とせしは古けれど北口より登るを此北口は日本武尊東夷征伐より帰り給ふとき此地におはしけるに富士を遥拝し給ひし所なりと云ふ浅間社の後なる大塚は即ち其所なりとて小祠を建つ此地即ち上吉田村にて役の小角柳比て繁栄す登山の人此に来りて潔斎し山行の装束を飾ふ此処より鈴原と云ふまでを三里の間徒歩より鈴原に近き丘道を騎馬場と云ふ古時浅間の祭に流鏑馬ありし処なりしが後吉田へ移せしと云へり天正十七年小山田信有の印書に騎馬場之上より鳴物従古法度之事に見ゆる此段可相心得者也とあり是古はこれより山頂まで鳴物を禁ぜしと云ふ此丘道より道漸く急にて鈴原に至りて小路に入る此処を則是より地の境とし御坂の嶺と称すと云ふ是より峰頂に至るまで里数を称せずして

合目を以て数へ十合に極る　神社考に孝安天皇九十二年六月富士山湧出初雲霞飛来如穀聚云々之に由りて又穀聚山とも称へし也山の形平地に穀を盛立たるか如し故に神も穀を量に擬へ大凡一里を一合に量りて山路を計りと云ふ是例の附会説なるへし　一合より絶頂までの勝地古跡は合数の下に標記を佛名観神祠及ひ石室等ハ数多の事故悉く挙ては煩しきすれハ縁由あるもののは大率省きぬ

一合目　足禅院廃趾　昔日吉田西念寺塔頭清光院の住持毎年六七月の間参籠して常念佛執行せしと云ふ

二合目　小室浅間祠　貞觀七年十二月九日に祀る所にて此山に勧請の初めありと云ふ

御釜　廣さ数丈ある一尺の石をもて石の面に穴あり径り尺尺計り深さ七八尺もあり

役行者堂　是より上に女人の参詣を許さず

四合目　御座石　高さ三四丈廣さ六七間の巨岩なり頂に浅間神社と日本武尊を祀る

五合目　小御嶽祠　岩長姫を祀り日本武尊を配祀す　詣する人いと多く天狗の面及び鏡天狗等の面を奉するもの数多あり　西の方に天狗の庭と云ふ処あり樹木皆偃臥して種々の形を成し人手にて作りしか如し

経ヶ嶽　日蓮年譜に文永六年如甲州吉田埋手書妙経一部於富岳半腹故為後日號此地一人因名此曰経嶽

不浄ヶ嶽　古は六七月の間山伏此處に籠りて登山の人の不浄解除の祓せし処と云へり

六合目　鎌岩　大宗旧記に永正八年八月富士山鎌岩も申とあり今も此岩の中より時々烟立つ事ありと云へり

七合目　駒嶽　小屋の中に聖徳太子の像と銅の馬とを安置す　太子傳暦に推古帝六年夏四月甲斐国貢驪駒四脚白者秋九月馭此馬浮雲東去三日之後帰来謂曰左右吾騎此馬踏雲凌霧直到富士岳上轉到信濃倶三越竟今得帰と云ふ是此故に因て駒ヶ岳と名つけしなとん

烏帽子岩　享保十八年六月十三日富士行者身禄入定の地なり

ガラス使用

八合目　駿州須走口より登るもの此の所
に合ふ故に大行合の名あり

九合目

絶頂

大御子　円く大なる石にして色よく滑沢あり物の形のうつる事鏡の如し
列なて五段となれり旭日の地上を離れんとする時弥陀三尊の影
此石に映る事あり之を来迎と云ふ　神社考に貞観五年秋白衣神
女出現双立舞遊時火炎揚有円光即祭之これ大御子とあるは之れ之

獅子岩　彼の南岸に斗出したる大岩の形獅子の蹲するに似たり　都良香の
記に頂上池中有大石石体驚奇宛如蹲虎と云へるは之ならん

薬師ヶ嶽

東賽河原

勢至ヶ嶽

銚子窪

銀明水

駒岳　七合目にも同し地名あり　其処にも聖徳太子の像と
駒の馬あり

表大日堂　此処駿州大宮道なり

鯆（このしろ）池　常にハ水なし

釼峯

釈迦ヶ嶽　峯の内なる凹院の方を内院と云ふ
峯の外を外院と云ふ

大澤　岳の西北方数十丈の谷ありて砂礫常に飛び流れて其声雷の如し
中腹より下ハ廣さ数十町に及び深さ量るべからず　中腹を横ぎる
者此処を踰ゆること難き故裾野に下り漸く向ひの岸に移る此
間一日路ありと云ふ

裂石

金明水

西賽河原

阿弥陀窪

（甲斐叢記）

觀音嶽

抑此山出現せしより此傳ハ甚荒唐なる談にて信し難からんか近頃吉備の昌谷精渓か撰ける登嶽記に其事を辨晰して頗其論の正しきは後人の惑を解くに足らんと其説を抄出して左に録しぬ

相傳江州之壌一夜圻為大湖駿乃湧出斯嶽是齊野之語爾天子聖明人民皡々皇天后土有何靈而為是殃孽哉或謂太古之世雲霧蔽翳人未見其全状是或古之遺言蓋方天造之草昧人民淳朴鮮所毀譽推尊則雖薪焉樵焉朝夕焉未嘗知其美猶遭陰雲重錮也文教之所光被民風日変東往上國稱揚此之神秀者稍々有之比及倭武王東征一望此山称為第一名山而後猶之被層雲翳白日始大著于人間是以有傳此説歟故曰是或古之遺言自此爾後都人下國傳相欣称雖海外異域人亦聞而云日本有靈岳至其奇者蓋千載一日以至於今矣

冨士眺望　　民部權少輔相尚卿

吹おろす嵐残見せて一むらのこゝさはらぬ峰の白雪

名所山　　吉里朝臣

おもひたち北いるの右よりかつらきまて名にや[illegible]山ふしの根

徂徠

美人微笑五雲端向背誰言都一般欲識士峯真面目却従

甲斐叢記

甲斐国中看

請聴甲人論富岳　全身在北面東臨　天下浪傳駿風語　未必山霊為賑心　雪翁

御坂山嶺

山嶺上は八代と都留との郡界とす古へ景行天皇の御代日本武尊足柄より此山路を越へ給ひて甲斐国に入給ふゆゑに御坂と云ふと云へり山嶺の上より見渡せば河口の湖眼の下に湛へ富士山その中央に峙して世を距る事三里余行て勝れて林麓の彼方に抜出て大空に立をいふも其影湖水の面に浮びて白雲を庭に隠すまじ景は眼下に一点の遮るもなく此山の全き形を見るは此所に及ぶなし往昔より御坂の富士とて格別に賞しつるもむべなりけれ

御坂路にかゝりて富士の根のさやかに晴て見ゆるのぞ　能因法師

時わかぬ雪に光るやきえぬらん不二の高嶺の秋の夜の月　敦忠朝臣

秋ふかき影さへこほる不二の嶺の雪にうつろふ秋の夜の月　基氏

富士の嶺をそがひに見つゝかの甲斐る山たかねの雲となりけれ　加茂季鷹

みさか路の名だゝる不二を見ぬほどに雲ゐにはれし高嶺ありけれ　青島忠賢

往く／＼と峰じも小高く浮みけれ　鉄秋

春ふかし不二や御坂の頂ばかり　逸山

池大雅富士図　釈大典

甲斐叢記

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

池生数遊富士攬勝四面此見甲之御坂河口 所謂觀云雨色連林聳秋光半挾襟雲霽空忽回首剗出玉芙蓉

冨士淺間明神　河口村

木花開耶姫命を祀る 三代實録曰貞觀六年七月十七日甲斐國言、駿河國富士山忽有暴火焼碎山岡草木焦熱土鑠石流埋八代郡本栖并剗両水海水熱如湯魚鼈皆死百姓居宅與海共埋或有宅無人其數難記両海以東亦有海水名曰河口海火焔赴向河口海本栖剗等海未焼埋之前地大震動雷電暴雨雲霧晦暝山野難辨然後有此災異焉 七年十二月九日丙辰勅甲斐國八代郡立淺間神祠列於官社即置祝祢宜隨時致祭先是彼國司言 往年八代郡暴風大雨雷震地雲霧杳暝難辨山野駿河國富士大山西峰忽有熾火焼碎岩石今年八代郡擬大領無位伴直真貞為祝同郡人伴秋吉為祢宜郡家以南作建神宮且令鎮謝云々 此宮古時は八代郡にありつれと後世になりて都留郡に隷しては池もしか云へる如し 地理を以て考ふるに郡家以南作建神宮と有れは一寸古へは今の郡よりも北なり 此處は郡の南ありけむ前年の爆火に富士山の裾野の村々は焼砂に埋れつらむと此處は川口湖の北岸なれど湖水隔りて爆火の及ばさりし中にて祠を建てしものなるへし

河口湖

ガラス使用

周囲凡そ四里余東西北ニ山を環らし南ハ富士山峙ち立てり うしま新ヶ崎 子持ヶ崎 なと名つけたる勝景もいとおほし その高根のうつし絵は上に漁舟を泛めて舟津村に至る夾間の景色筆も池しかく画きうつし難かるべし

河口のほとり郷にやとりをかりて

住なれし里人の眺めあかくは雨ふらんそねの雪を　高橋石足

影うつる郎の高根につゞれて湖水あまる川口の湖　清水濱臣

浅間祠　上吉田村

諏方の林にあり 祭神木花開耶姫命なり 社内に子祠若干ありて次第に立ならべり 大華表高サ丈八尺 両柱の間 三丈三尺 何も 額竪七尺五寸幅四尺七寸五分 文字 三国第一山と有り 曼殊院宮御筆 金剛入道二品親王良恕書 寛文十三年丙子二月十七日 秋元但馬守寄進なり 勝山記に文明十二年庚子三月廿日富士山大鳥居立と有れば 此華表は富士の璋楔にて専ら此祠の為に建しにもあらざるべし 田園雑志に吉田といふはふじに至る路の口とこそはべりければ

今宵は二月十五日 月いとかすみて ふじの雪さたかにあらずなりければ

きはまやこ宵の月の影にふ富士もあはに雲かくれけし　聖護院

日暮の像の緑をそへてふ山をなほふるゝこの邦　加茂季鷹

山中湖

富士八湖の一也 或は鈍牛湖といふ 形の似たる体を以て名として為へし

甲斐叢記

ガラス使用

早蔵に牛を駆ひのて雲をれば忽ち駿河の方と云ふ

十二山嶽　（大石村）

大石山頂の北の小嶺に随ひて十二の峯指の如く聯立せり其東西に役行者の祠あり傳へ言ふ昔役行者此山に修行して後に富士山へ登岳せしとなり今に駿河大宮浅間明神北神宮此處に来り里長を御導して登山あるは此縁由ありとぞ此山の東の捷より長濱村へ越す坂を鵜飼鳥坂といふ山頂より東河口西西湖の湖水を瞰視めは龍蛇蟠繞の如く画も得やらぬ景なり

西海　（西海村）

東西一里計り南北稍狭し左右と東とは皆山にて都留郡との境界あり此處と精進本栖の三村は三ヶ嶺を隔て富士の裾野にて何れも八代郡に属せり西海又ハ西湖とも唱ふ三代實録に剗海（せのうみ）と記せり古昔ハ背地湖と連ねて一湖なりしならん

鳴沢　（鳴沢村）

或ハ鳴沙とも云ひもしは件に一説には鳴澤にあなるさとかくあり那るさとは山よりゆきごふる事あり其鳴る音を鳴砂といふ那の山中は白砂礫混へなれば下る事ハ一定なり人のおそるにつきていはゞ下りて一夜の間に上ふ云れ土人の説に富士山の西北の方に数千丈の谷ありて砂礫常に流れて其音雷の如し中腹にありていはさ数萬歩あり之を大澤と号すと云ふ然らハ鳴澤は大澤の事を云ふなるべし[illegible]の

ガラス使用

人のおもひありとていさぶるや一夜の間に上ると云ふは砂走道を便人

語りあるなん鳴沢は人の下道へきとなるまじ

ふる雪に峰の烟はのぼれども外のなる烟こほりあまりけり　二條院さぬき

けふり立思ひのやこほるらん外にあらさとも音むせぶなり　後鳥羽院

いくばかりかつむ雪も高ければきえば見えんかの外のあらし　法眼全真

さ夜ふけて外のなる鳴沢こへて音や烟にまがふらん　慈圓

紅葉ちる外の鳴沢風絶て清見か関に錦おりつく　權中納言公雄

さ夜ふけは富士の嶺も雲のうちにして鳴沢外の音ぞ成る　俊頼朝臣

小野の音にたなさのこたかみは　俊頼朝臣

ゆふ晴外のあらしありける　源氏真

石花湖（せのうみ）　精進村

精進（しやうじ）の湖とも云ふ　精進一に青苑と作けり　家忠日記に庄地とあり　天正中の尊輩には志わお町と記せり　或は背地とも書ける　里人の説に此村は役小角富士登山の道に助力せしが後世になりてより登山のもの此故まて身をそゝぎし　精進潔斎となせし所に地の名と成りけりと也　されど是は附會にして信し難し　萬葉集に詠る不尽の歌（長歌）石花海（セノウミ）跡名付而有毛、彼山之、堤有海曾（ツヽメルウミゾ）、不尽川跡（下略）又和名抄の注に石花二三月皆紫舒花附石而生故以名之和名勢とあり　三代實録曰貞觀六年七月甲斐國言富士山忽有暴火焼碎崗巒土礫石流埋八代郡本栖并剗（セノ）両海同七年十二月二日因暴火之変于今未止遣使者

撿案、埋剗海千許町と有るに據れば石花湖（せのうみ）西海（せのうみ）古昔は一湖なりしが富士の噴火にかゝりし時二所となりしものならん 然れバ石花とかき剗とかきしも字を略したるなるべし 此外背地といふに係せし者あれバ富士の山の後といふ意にて背の湖とは名づけたらん 所離坂より此邊を望視れば目も及ばぬ許に焦土の跡にて岩石墨のごとく焼て作物なし、僅に蕎麦を植て食料とす 湖の東西一里南北二十余町水面に焦石の尖り多げなるに露出て鸕鷀（う）の棲べるに似たり 里人長さ六七間計りの丸木舟を造りて岩間に携へ漁りす 湖中に鮒、鯇（はえ）多く産し又秋冬の際は鳧（かも）、雁群れ集ひ帰るに雁門より山嶺の上西北にて門の如くなる所より此處を越る故は越坂と呼て高く翔るなり何しはず里人縄網をはりて之を捕ふ故に羽坂を称するといふ 湖北右へ廻り山足に循て登降一里餘にして笈投に至る 此より望めば湖は東に見え西に向ひて西里も隔りて其間一面の叢樹にて渺々として涯しなし 所謂富士の裾野の西北の隅なり 土人は之を九尾と稱へ又夫木集に於る鳥羽院御製の歌あり

富士の山甲斐の白根より東を際をわけて夕立ぞする 西

石花湖を見る作　先石武

日の出の僧の宝に霧山の鐘聞えける其しの坂の鐘と聞ゆる作

夕暮に市の坂手（て）にして雲越えてそ何雑坂何れと問ふま

に消えてゆく風まぞ吹く常にあり千代の栄の繁に留まる作

甲斐叢記

梢の志都枝に吹よせて来ぬ末の末にも むら鳥高く九山中
此山を志芙くふ雪も都九 斗ばかりのを志ふかしみ知れ不志の
嶺のこえて字ならはし

本栖湖（本栖村）

一に本巣に作る 此地駿州の境にて関を置ける 此湖方一里と云へども
南に長く北へ狭し 湖より大なり 西金額村の山湖へ指出たる長
嶂なるを河内領の隈とす 北ハ湖山烏帽子嶽を負ひ 南ハ
金山嶽 龍嶽に向ふ 湖の東に村落あり 其東ハ大室 青木原富士の下
路へつゞきたり 湖の南に廻り河内領の青園村より出る道もあり 行程三里
ありと云ふ 天正壬午織田公凱旋の時此に宿陣あり 富士を見て興ありしとぞ

甲斐叢記

酒折宮

日本武尊を祀れり 日本書紀 景行天皇四十年夏六月東夷多叛邊
境騷動 天皇持斧鉞以授日本武尊（中畧）命吉備武彦大伴武日連
令從 亦以七掬脛為膳夫 冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之云々
蝦夷既平自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國居于酒
折宮時舉燭而進食是夜以歌之問侍者曰珥比麼利菟
玖波塢須擬氐異玖用加祢菟流諸侍者不能答言時有
秉燭者續王歌之末而歌曰伽餓奈倍氐用珥波虛虛能
用比珥波苔塢伽塢即美秉燭人之聰而敦賞則居是宮以

甲斐叢記

ガラス使用

靫部（ゆけひべ）賜大伴連之遠祖武日是也 此社の旧跡は本社より四五町北なる小阪に残れる祠あり 土人古天神と呼ぶ 伊勢原その地よりうつせしや未詳 神宝に燧嚢又環繞三面刀布（とうふ）鳥布（ちょうふ）等を蔵せり 常時は人の容易に詣て有りしものと見えて山腹より頂へ懸けて石室の跡多くの残りあり、指出の蹟に至きては皆開山より 深草、板垣、石水寺、等の方は御岳金峯に接きて幽邃けきとも近き道なれば高き山なく道路太なるに且少し 云々

酒折祠雨　中納言為綱卿

着ぬ花はたえて酒折の杜かけの木の葉のあなにちるらむ

酒折の宮

陽垣のすゝしさ久しさわれは松そ木高き神のひろまへ　従一位資枝卿

世安く守るかひある神垣のひくきためしはつけて久しき　従三位資雅卿

榊葉のかはらぬ色もそのまゝにつもるめぐみを祈る神垣　保かすみ

跡たれし昔を遠き酒折のさかへむ世を仰く神かき　栂井一室

白雲のたなびく山の神垣も道ある代には跡を尋ねて　本居宣長

謡つくは歌と云ふ筋の代につたへてさかへん酒折の宮　仝

東方のあづまのえみしまでにも神の道を伝ふがおしへ　加茂季鷹

夜過きて我君がねつる御ぜぎの梢吹く風の音　仝

九重の松吹く風にひゞくなりとほき神代の昔おもふに　忠告

新治のその言の葉をきゝえけるもことは御わか宮　深光章

ガラス使用

万代に神さびてよささ美の影にゆく御折の宮　萩原元克

酒折のやかたは此や其かみの歌の始を今につたへきぬらん　飯塚久利

日本武神の昔の宮所にゆきてかけんありへおくは津守　勝巻正興

此の神に花さく日とて祖　闌更

酒折やあふりておぼろよ　尭好

衝雨迎遊酒折宮、松濤晴聴海風中、欲傳千古賡歌盛、相見君臣雅興懐　雪谷翁

松下残碑鎖薜蘿、重縦蕭索夕陽斜、依然千載傳遺響、村老狂吟新製歌　坂田以高

雲封連山傍古宮、冷遮日色碧童々、請看神境随斎糠葬団々

千手一葉松　萩原三松

武田信重舘址　小石和村ニアリ

成就院の地にありといふ本村南に続き前に路あり、岸町、的場、所々大門、茅の地名あり此の東に家臣逸見太四郎朝信の屋敷あり東西に思堤あり北より西は重堤にて南は開けりと云甲斐国志録全大守殿に譲て中世安芸守信満戦死して信重は上方に奔り二十余年を経て永享中管領上杉持氏に従ひ結城の戦に功ありて本国の守護職に任し遂に逸見在鎌部上野介を討と伝ふ然に逸部を打滅せしは其孫信昌朝臣の時なれば是説誤なり古傳に信重黒坂太郎といふものを討んとして矢を帰ひ深ひて終に戦ひける也

甲斐叢記

小山の城主穴山伊豆守信永その隙を窺ひ小石和に訪ひ来り陣討出し終に信重朝臣前後の敵に途を失ひ遂に自殺せられしとなん　後花園院寶徳二年十一月廿四日なり法諱を成就院と云ふ武田系圖に其辞世の歌代のせあり

ものゝふの守信を業し名を残る甲斐の武田に一人まといちん

奴白氏居址　（北八代村）

奴白は即ち（やつしろ）此假字なり生山系圖に武田太郎信義朝臣の弟信清を奴白與三と記せし後に武田刑部少輔信重朝臣の四男伊予守基經を奴白殿と稱し又八代治四郎と云へり古老の傳に寶徳二年[illegible]信重朝臣小石和にて最期の時家臣逸見朝俊に遺命して幼息一人母御前と共に奴白殿方へ落しまゐらせし信重朝臣の北の方は奴白某の女なりと云ふ成就院所持の系図に據るに幼息は即ち基經にて八代家を嗣しと見えたり其居址今は悉く畑となり又積翠院といふ寺の境内は信重朝臣の嫡子刑部少輔信守朝臣の館址にて四望湟の形粗存せり能成寺の開基なり後に城山甲府へ寺を引遷されし故今は能成寺塚とて僅に形代をのこせるのみ

西行坂　（萬澤宿）

所の者は西行坂と云へり富士川此ほとりにて折旋て東へ落つるなる西行歟とぞいふ岸の上の高き所に一株の松あり其枝蕩くけびたり其根高く

露も實に千載の古木なり　里人の説法は　昔西行法師廬を結
びて暫時居られける所　駿河なる所の畑のと詠ぜしは此處なり　因て
西行坂と名くと云ふ　然るに山の低く平なる上に富士の山餘所に見えて　盆中に
白壁を盛るとは斯ば景色を云ふなるべし　北の方は遥に村落を見
下して風景すぐれし　凡そ富士の山を畫ける繪に前に山坂を書し　又
村を添へたるは此所の西行坂と此處との圖なりと云へり　按に　新古今
集に　東の方に修行し侍りけるに富士の山を見てよめる

西行法師

風になびく富士のけぶりの空に消えて行衛も知らぬ我思ひかな

身延道の記　元政

廿九日　けさあけて前保鉄出づきの事なるおごりなくはれて所にゆきふりたるも
見おろしの南山　雪ふれば久しくあるにはあらねどへば　又人富士にゆきあり
て晴れぬと云ふ事なりと云ふ　路に一むらの雲も見えぬ山のまろたらつく
しく　殊にめづらしきになずく　似るなり書畫にて描道よりみるにはまさきり　所の
者のいへるは　富士は甲斐の山とや所の其いりかたにも見ゆるに大船く
おもては海さりて山と云ふ　詳に云ふちかくあり　程よきさのさびばなるも
びくえんし事はあり　思ふ事いとほしくやありけん
この世にそれいまで高くあり富士の二つ根は裾までぞ見る
西行坂をよめる　よみ人しらず
わきまへてはちかとぞおもふまたびひふく空に乃面雪北むかひの峰

ガラス使用

機山公の祠

乾徳山恵林寺客殿の西にあり元亀四年武田晴信公卒し給ひて此所に葬り以恵林寺殿機山信玄大居士といふ所謂武田不動は是れなり

駿河国誌

富士川

駿河三大河の一なり流の遠きこと其水勢頗る急なり水上は信州八ヶ嶽より流れ出甲州に入り釜無川 油川 早川 落合ひて大河となれり

白鳥山塁 本州の上方にあり 白鳥 城跡は残くまであり 信玄当国に入る時築し

蒲原。

富士川より東方本陣の山の上なり富士浅間の社あり其社は建久八年に春日祝之命に依て当国の住人岡部権守泰綱造営の奉行 残書あり学作成時 祠官が所せられ同八月十八日富士郡北山御厨飯島の郷代官附

甚る永来五月十九日　毎年参詣人出する事有し　又同郡之久澤里

軍事かくれと云所我姓曽我兄弟の墓有

鷹岳山福泉寺

曽我氏開基の寺院にして其牌を安置し　又狩宿村は頼朝公将伴の

旅館にし此傍上井出村の間に又兎執餅の跡有

善得寺　（善得寺村ニ有）

神君駿府在城の時御旅行の御遊村　此寺に御休泊後此所御向の

別当職を與へ済宗の寺院有

富士

三國無雙之名山闔八州望之其形不異其嶺如八葉蓮花故所向三峯

而其峻也蓋以十本骨扇中折摺一間為九本骨例之能彷彿矣自箱根見之五峯自東見之四峯自北見之三

富士の十名

ゝ藤嶽　　鳴澤高根
塵山　　常盤山
二十山　　三重山
新山　　見出山
三上山　　神路山

右河内躬恒之秘蔵抄ニ有

浅間神社

ガラス使用

式帳に載する浅間神社名神大社にて当國一之宮なり　則其所を大宮といふ　昔は官幣係りて大祀の神事行はる　今猶その遺風ありて四時の神事おごそかなり　本社は木花開耶姫にて　相殿二社ありて三社の宮殿あり　右殿の神は一社の秘傳なりとぞ　左殿は大山祇の神は神花開耶姫の御親の神なり　何れも伊勢朝熊は社内同所の神なり　伊勢にては櫻大刀自の神とも申す也　又名は吾田鹿葦津姫と申奉る也　又浅間朝熊を和訓古通ずる所有とぞ　あさまとは朝熊の因あり　此神は櫻を神木とし給ふ　故伊勢の神官是は櫻は前栽木なれば　富士山も櫻のよしみに縁あり　大かた初て櫻木に倚り詠ひしとて　西行法師様の宮へ詣仕りて

神風や心もまくでまるせ給る櫻宮の花のさかりは

神代より今をさかりに朝熊や幸の櫻のたねなるらん　　神主

富士山

萬葉作布士又不盡又不自　風土記作不死山又称陣又福地　其餘諸書皆作富士

此山の名義説は本朝文粋都良香富士山記の説の事は富士郡の名の下に辯ぜしの如　又竹取物語に赫夜姫不死の薬をこの山に捨りて帝へ奉りしより不死の山と云ふの如きは　ふじと云ふ辞につきて不死の字を用ゐて長生不死の義とす　是字音によりて云ふものにて論ずるに足らず　つまり富士と云ふ名の義は思ふに　ふじの山と云ふは浅間此山と云ふ事なり　書紀神代巻

駿河国志

ガラス使用

に天照大神石窟に幽居ましける時に八十万神俳優をなしし段に
亦以天香山之真折木為鬘以蘿為手繦而火處焼覆槽置顕
神明之憑談とて且此段は天照大神かくれさせ給ふ為に神わざの
俳優なり是に相和して其ろ上手諸ともに舞なして拍子をとり
玉など云ふ事あり この両條と云ふ辞を此ほとりと云ふ文字用ひけれは この山の
形成の姿みな楽器をあはせたらん形なれは音の出となりけんをふせいがたし
ふせげは ゆすなと動く辞なれば音便に崩れて濁音にも訓るを知て
かくはよひならはさせて人の耳なれの便にいふ意なるべし意ありて
其様は用辞あれども上古物に名づくる事を異様にとなふるもの
多ければ其のあれ(ま)ませとて(か)くいひそめし(か)ものなり古人の集中ま(た)和歌に

かひなき国をさやかけるんのけれなくよそほりふせる小松の中山と見給山状
伏せると云ふの證なりまた臓きあるの様なることは茅まろき葉子なきへ
甚て様ぶりて新廣く器を穿ちたる人形なれば名川ならせ給ふと
云て源氏物語帚木にもなほなる風ふせ給ふのこゑはなほ
にあはれにきのふの帚木なくて子忠をまろくて伊勢物語に富士の事を比叡の
山を二十はかり重ねあけたらんほとして形なん塩尻のやうになんありけるといへり
其塩尻と云ものはいかなる物か詳ならず種々の説ある中にも塩目
は塩の名なり其の形に寄飾といふものなり山の形まろはちからせたらんやう
なれはしかいふとえふ塩尻のよしあるは論せずありは見るさまさまとも（を）
は人の目にはおふひかれきものとて十月の見にしおもしろ高野かならぬ古歌にも

ことさて堅誌に粉陣福地をおいてちの音のかよひけるは全く謬り
なりと思へと延喜式に冨士郡に富知神社あるは則今冨士郡福
地村に福地大明神社あり是なり此神社の名は福士よりまたと別に云へる
ものも音に郎ど出ぬらるもの謬りてちの音の字を當たる福地の名成りしなり
都良香か記に承和年中從山峯落來珠玉有小孔蓋是仙簾之
貫珠也といひ又貞觀十七年十一月五日吏民仍旧致祭日加午天甚
美晴仰觀山峯白衣美女二人雙舞山巓上去巓一尺余土人共見
とといへり又義楚六帖に日本國倭国在東海中秦時徐福将五百童
男五百童女止此国東北千余里有山名冨士亦名蓬莱其山峻三面海
一朶上聳頂有火烟徐福止此謂蓬莱至今子孫皆曰秦氏なといひて
此山の神靈に測あるとは我 皇國の知るゝみならず遠く唐國にも
聞えて彼國の法令にのせる所の蓬莱といふ仙山此山の事なり
といへりされは峯に日月残凝えて積れる雪は於三伏の盛暑に
殘りも燃ゆる稀なりしも降るゝ時は直に西國よりの地を渡も其
形状三段なるまゝ至りとは語るが如く西域流沙の大山我人此國に通ひ
来る所を見るに此山類なきものは世界の寶にて天地間第一の名山
神と崇めしさて此山の主神を淺間大神と申す即ち大宮にまつる所此
延喜式内當國一宮淺間神社是なり然るに何れの時よりか山上
に大日薬師抔の佛像を安置し諸人称名念佛し詣るめること
中世浮屠氏靈異の神山とみてはなべて本地垂跡といひ且僧徒の

ガラス使用

佛說の阿含にも世路を歎く此醉生所なる悪も無きことなき也

○富士山洞窟紀行（ぬまのや主）[redacted]

維孝霊皇第五年　名山湧出駿中天　玲瓏八朶千秋雪　日
到紅洋黒幔邊

遠詩は之れ日本の詩家大沼枕山が富岳を題する名吟なれども彼山は遠詩に謂ふ如く孝霊天皇の第五年に湧出せしも傳ふる由果して然るや否やは往古の事にして書契の考證も未だ確かならざれば疑はしき廉なきにしもあらず日本の歴史には崇神の五年に近江の琵琶湖陥没して一夜に富士山湧起したりと見ゆれども此等荒唐の説も稽ふるに近世の学理に徴し之を研すれば傳說は蒙昧時代に生じたる憶想にして歴史に記せしものなるを知るべき也

ガラス使用

云々

巍々たる山嶽青空に突兀たるを見て土人其所在を問ひ其奇なり深くあり一面の雲霧晴れ渡りたるを見て何ぞやと此は何物ぞ何青々は何物ぞと未だ其物質の何たるを識るもの力なくして模索の談を為したる時忽然として一の貴女忽地より来り仔細に此地の人家を訪ひ三十三の人家あるを知り蒙昧の人民に告げて云ふ我は今より此山に登り此山の主となるべし此鏡は我の遺体なり我れ亡き後は之を祀せよと説け終りて佩帯したる一箇の神鏡を土人に与へて去りけり当時其契の信ずべきものあるやを以て此貴女の何人なるかを知るもの無しと然るに後世神道者流の説くところによれば此貴女は

則ち木花開耶姫にして富嶽に浅間神社あり該社は木花開耶姫を祀り南都留郡明見村福仙寺の第一の宝物は木花開耶姫の神鏡なりと云ふ然れども姫を孝霊帝の世とするは遠し

云々

秦始皇帝六国を併合して天下を一統し遂に方士徐福等をして東海の蓬莱嶋に赴き不死の良薬を求めしむる事漢土の史記に見ゆ我国の歴史にも又徐福等の事を説く其事実相符合せり蓋し秦の時代に於て方士等のさして東海の神山となせしものは日本の富士山をさしてなるべし崑崙山東日本に至る迄富士山に次ぐべきの高山なく殊に其形八朶玲瓏にして冬の間は積雪凝結して詞人

ガラス使用

の白扇倒懸し東海天の吟を移せしの如く偉観あり然し三伏炎暑の候に当り諸る部分の雪融解すれば山毛の雨褶多きは朝暾夕霞と相掩映して万古天風吹けども折ざる玉芙蓉の如し其形容の雲表へ聳るは地球上屈指の名山にして されば徐福等の来りて神山と爲し所の山は即ち富士山にて此山に薬を求めしは事実のありし事なりや否やは詳ならざれども此山には種々の薬草を生じ中就体力徒若の如きは此山特有之なるは人々の知る所なれど徐福等の来りて薬を求めし事を歴史に記せるは或は其形跡のありし事ならん云々 此都留と云ふ郡名につきては土人今なほ往々徐福の事を説けり云々

福仙寺の寶物第三に日本武尊の縁起あり 其由来を記せるに人皇第十二代景行天皇の御宇四十年東夷多く叛きしかば天皇は皇子日本武尊を征夷大将軍に任じ給ひ東賊を征伐せしめらる 尊駿河の国の富士野に至りし時賊は偽り降りて尊を遊猟に誘ひ火を放ちて之を焼し奉らんとせしに尊は剣を抜きて草を薙ぎ払ひ野火を以て身辺に近づけざりしに折しも逆風大に起り火勢は賊の方に向ひ其難を免れ給ひ後の東賊を征服し古相模国の都留郡に入給ひ休軍せらる際其妃の橘媛臨月にあたりて悩み給ひしが間もなくして皇女御降誕あらせられし由 其所をば富士媛となづけけれ在の（ある志）東道記太夫

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

なましの事也彼燧石を添へ此の世常ふる池の太夫氏へ通氣えけるが如くして今福仙寺の宝物となりしとぞ尊此地に駐蹕の時富嶽を遥拝すれば不便雲霧晴れ揚りて嶽の全体あらはかにありしかば殊の外は満足に思し召され明らかに見へれりとは云傳ありしより後の人何曽谷を改めて目見（あすみ）となせしとか其が遥拝せられたる地を富士見塚と称し其近傍の地を富士見地と云ひたるより後に此地に建築せし寺をも富士見尊山山野寺と云ふ事ありと云々

富士山の良位に大澤鳴澤と唱ふる地あり此地に二段の瀑あり其一は大にして其二は小なり往昔富士山を遥拝するもの身体を小瀧にて洗浄したりと見へ中古時米郷蹈の事を以て或は米山と呼びしと云ふ彼富士見地は米山の出でたる尖角に当るを以て米山尾又瀧尾と称し其尖角より平地にかけて何れの時よりか相楽一面に生ひ茂りたるを以て茶丸尾と云ひ小瀧を分けて白糸の瀧と云へり承久二年庚辰歳三浦寺尊四世浅間房富山なる者此澤の大瀧をひらく

人皇十五代應神天皇の御宇明仁改元の二皇子東国に遠来ありと聞き彼は認め得てまるくものと思召され富士の神殿を廻り池太夫の許に日本武尊の後孫のあるを御聞し此地に滞留して遂に日本武尊の二孫女と婚し子孫大繁栄す当時此地を都留

高座郡軽島の里といひ南方の山は高座山にして高座山社
大権現を勧請し此祠は今日猶ほ山上に在り
降て人皇三十二代崇峻天皇の御宇厩皇子富士山に来り都留
高座郡日向山の古大木を基として祖心神天皇を祭り寒川明
神社と称し日本武尊を山野神社に木花開耶姫を浅間神社
に奉祀し自身の像を描きて神祠に附與し明仁王の後孫記
太夫を大宮司となせしと云々」
現今富士の形状を見れば峯勢実に八朶に分れ其脈北に行くものは
甲斐の諸山に連り東北に趣くものは相模の山となり其西に走るものは
駿州の山となり南に赴くものは伊豆に至り断続して大島三宅八丈
の諸島となるものゝ如し
八朶の玲瓏なるを望むは甲斐を以て第一とす峨洋の風景殊に佳
なるは御坂山嶺に於て河口湖と富士の全景を望むを第一とし之れ
そは全容露出て風致に乏しく然れとも奇観は富士見十三州
に於て其美を見るべし　田子の浦は山脈より全体を望むを得るも
噴火に因て所々凸起せる小山瘤の如く観望却て不可なり
山麓に湖水八つあり山中、河口、精進、本栖、西湖、澤湖、明見、
（以上ハ甲斐に属す）須津（駿河に属す）と名く之れ富士の八湖なり　精進、西湖
は二湖なれど湖底相通ずるを以て水の増減常に同じ西湖
は往古剗の湖と云へりとぞ

富士洞窟紀行

桓武天皇の延暦十九年庚辰前には五個の湖あり旧記に依り判断を加へて噴火前の形状を記すれば

河曽湖	横 二町	長 五丁	
小舟湖	仝 二丁	〃 四丁	[illegible]くいまも清水を潤しをる
西の大湖	〃 四十丁	〃 三里	
西の小湖	〃 八町	〃 三十丁	
南の湖	〃 一里十丁	三里	

神武天皇御即位元年より桓武天皇の延暦十九年に至る迄実に千五百二十六年其年代悠久なりと雖も富士山には一回だに噴火せしとの事歴史上に見へず然るに延暦十九年に至り俄然爆烈して大雷の震動するが如く此大山動揺して山頂火を噴き上げ石類の溶解して熱湯の如くなりしもの七拾ヶ所より迸り出でたり村落十七（[illegible]など 河曽見へ、西吉田、東吉田、中吉田、日向、川口、西山、大山、上山、川久保、上二十、中手、下手、元住、成川、広里、天神、）人戸千六百余人口五千四百余此災にかゝり鏖して彼の噴き出たる熱湯は次第に迸り流れて南の湖へ押し出し此の湖を二個に別ち小室の地に一湖を成し西の大湖は熱湯の為に面積半となり熱湯は流れて駒橋村（今の猿橋）に至て尽き此餘六ヶ村（社見、相模、田原、宮原、田宿、駒橋）焼失せしが人畜は僅に命を全ふせり

此災後僧最澄此地に来り衆人を慰め焼け残りたる木材等を集め家を建て日向村に一寺を創立し薬師如来雲切如来

聖徳太子真筆の掛物等を安置し佛事供養をなせり此寺は
則ち富士山延暦寺なり又都留下高座郡の死者供養にも
一寺を創立し是を寶正寺と称し寒川神社を武蔵の国境に
移し其地を高座郡とす此に於て都留高座と初めて別郡
と為る然るに以来は今に至るも明見村の加賀美某方に存せ
り又富士山延暦寺は徳保二年三浦大宮司か雑髪して開
山となり寺號を三浦寺と改め弘長二年僧親鸞浄土新宗に
改め明見山福仙寺と名づけ其寺は今日仍ほ存し都留郡
中の古刹なり
延暦十九年の噴火以後富士噴火の度数

天長二年　貞観六甲申年
貞観拾二庚寅年　承平七酉年
天暦六子年　長元五申年
永保三亥年　寶永四年
噴火の時日及び噴出期の長短等を得て知るべきの書類無けれ
ども其噴火は延暦元年の如く劇烈ならざりし
寶永四年の噴火は近世のことなるを以て噴火の事記せる書が山の
近傍に灰及砂を降し其砂山の南部に堆積して一山を為し
之を寶永山と名せり故に富士山は開闢以来九回の噴火にて峯
勢八朶に分れし五湖は変じて八湖となれり

大同年間の頃より岳麓に登岳の例く多く（但し古しへは大抵小識そ頭を浄め以て遥拝せしのみ）大同二年丁亥歳前坂下に仁王門を建てたり　頼朝富士にまき狩せしより登嶽者は毎年増加したるが更に嶽の期を定められしは建久五甲寅年にて此年六月朔日を山開きと称して登岳の期節とし八月十五日を止山と称し　十五日以後は絶て登山嶽するものなし　山の別当は高座郡寒川神社と都留郡の寶正寺より出張して之をつとめらるが此霊山嶽は男に限り女は登らしめず其所以は女子は不浄のものなりとし登山嶽を許す時は天狗も別ておれ荒しも事に登岳せしも其年必ず暴風雨等の災害ありと云ふに在り

抑此富士山は都留郡の西南にあり南面は駿河に属し北面は甲斐に属す往古は甲斐駿河相模の三国に跨るとせしが建久三年都留郡を甲斐に入れしより跨る處は二国にして三分は駿河に属し七分は甲斐に属し頂上に至りて両国の分界明瞭ならず登山の路四條あり　北は吉田口　南は須走口　村山口　大宮口の四道なり其内須走口は八合目に至りて吉田口と合して一條となり村山道は大宮道と合して登山の路一條となるを以て此處を大行合と称す　南北唯二條の道あるのみ　而して登山者は多く北方よりす三伏炎暑の候　登山の期至れば　登山者は吉田河口等に宿して案内者を傭ひ之に旅具を持たしめ登山門を通り松林の間を

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

南の方なる事凡そ三町にして一堆丘あり大塚と云ふ是なり塚の上に
浅間神社の小祠ありて木花開耶姫を祭れる又行くこと一町ほどにして
諏訪の森に出づ之より半町ばかりにして御室平に出づ右に行くこと
八町ばかりにして清泉湧出す土人之を泉津と云ふ泉津以上曠漠の
地其一隅の水あり此水を流通して浅間神社に至らしむ登山者
四肢を清浄す右に転ずること十町余にして一大洞穴あり之を胎内穴と云ふ
洞の口径は五尺計右面平滑削るが如し入り行くこと四丈余にして
子宮と称する處巌上より出で岩の上に突出して乳房を垂るゝが如し
皆崩ありて進む又十丈余にして稍平潤の地あり奇岩怪石累
々として駢列す恰も人の胎体に似るを以て此名ありと云ふ
凡そ此より登らんとするものゝ皆此室に入る窟の右の地より此辺の
不毛鋼鉄に類すと蓋し熔岩の凝結せしものなり中に
穴あり名づけて大樹木林と云ふ者に於て其の痕を存して熔岩の際
此等の大樹の間を迸流して後大樹腐朽したる所穴となり天然
に此形をなししものなるべしと云ふ取り右路に出れば不遠を過ぎ
なる地あり此所を過ぎ與と称するものくこと二町にして姥子と云へる地に出
づ東に行くこと五町にして緑松の古木あり旗掛松と云ふ建久四年頼朝
士野に狩する時旗を此松に掛けしに依り此名ありとぞ又西へ行く
こと拾町にして鳥居木に出づ之より又拾町計にして鞍掛（くらかけ）場に出づ
此地は山足にして路漸く嶮なり鈴原と称す吉田を距る三里余

肆四字あり登岳する者此の宗息して此に至るを得此より馬を下りて徒歩す路愈険にして古封林と云ふ女人爰にて云ふ此地の名を御坂嶺の山頂と称しと蓋し大差なかるべし登ること貳里にして大日社あり壱合目と云ふ是より頂上に至る迄里数を記せず総て合目を以てし十合に至て盡く壱合は壱里に准すれども其実数餘原より頂上迄七里計りあり二合目より三合目に至る迄方士神宮峯修法の古社頗る多し四合目には大山富石あり一周三四丈広サは七周其上に浅間神社と日本武尊の小祠あり五合目に茶屋五軒あり壱合目より此迄は古木天を蔽ひ森羅道を蔽て登攀し難き所多く是より上は砂石山を為し草木生せず登路嶮なし

近国の諸高山皆脚下に在り岳頂に登る事能はざるものは此地にて遥拝して下山す六合目に鎌岩あり土人称してカニマヒの岩と云ふ蓋し猶の訛あり此地時に雷は烟を吐く事あり今に至るも猶火氣余末の伏するならん七合目に小屋九軒あり是より登路の峻嶮なる名杖を便とす砂道にして登路なく一歩進みて半歩退く雲霧脚下に起り雷光雷鳴又脚下に在り其頂雲に蔽はるゝの時には忽ちにして晴れ忽ちにして曇り須臾の間は明晦定まらず漸くにして八合目に至れば即ち大行合なり登路須走口を暁発して日暮此に會す下瞰すれば中腹以下は皆平地の如く雲上の雲独見を帯び千万里の間に攪漫し夜の初更に至るも尚然り更に至れば東方既に朝をなし

彩雲万里の海上に棚引けるを見る数刻を過ぎて始めて暁暾を拝す
其大なる数十里なるが如くに見ゆ少し地平線を離れば旭暉の間に大さ
常の如し是より胎宮を出で鳥居御橋を過ぎて俄頃にして遂に峯
の周廻五拾町中央は空虚なり最高ところは千古の雪ありて不溶ず
或は忽ち雲を出し忽ち風を出し黒鳥翺翔其形鵬の如し
気候は寒威厳烈にして肌膚粟を生ず西方の連山高嶽を剣の
峯と云ふ世に云ふなれど西は駿遠三及び伊勢の海岸東北は筑波日
光浅間岳等小丘の如く東海は渺々として千里際涯なきかと
見ゆるのみ頂上は焼砂の中に骨貝ありて滑沢なる細石あり皆
砕けたるものの如し山の西北は砂礫常に飛ぶ其声雷に似たり　下山

は砂礫と共に八合目分れより須走道に出で砂払に出で吉田に
来るなり健脚者は半日程を出でざるなり
裾野に於て有名なる人穴及び氷風の穴のある大洞あり古へ頼朝の巻
狩の節仁田の四郎が君命を奉じて探りしは此人穴なるなり洞口は
崎嶇たる岩石弓形に門を造り下は岩盤にして甚しく凸凹上は雲霞
ひ凝せる天井を為し又た日光を遮ぎりて岩石突兀危からず
今まさに頭上を打砕かんとするが如し進む事電断程にして已に寒
気堪へ難く身体為に戦慄するを覚ゆ中更に進むに従ひ次第に
多く炭酸瓦斯の気満ち呼吸甚だ困難なりとぞ元より燈火
など打消さるゝと云ふ風氷両の穴と云ふは悉く滴る氷の状一年

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

の如く悩煩をかなしみなきしものなりん　云々

冨士山七ふしぎの事

一　頂上の金明水

其名も尊く御頂上の焼石の間に直径一尺五寸許深さ三尺ばかりの穴ありいと清らかなる水は常に其内に溜まり諸人之を便利となれ又其かみにひたして佛神前をあはれば更に効験更に著しく殊に病症の信徒は小さき樽など携へ来り一日に数百人づつ汲み取れども曾て涸きたる事なし又此水は汲まずして数年を経るとも腐ることなく又如何なる旱魃の年にてもいつも穴の中に満ち居て少しも其の減る事なし誠に世に稀有の清水なり

二　八山嶺の笠雲

花の朝月の夕など長天にはたゞ一点の雲さへなく風だに吹かでいとしく静けき時にありて御八葉よりもや湧き出でたりけん白雲生じ動きもせで御山の頂きを蔽へり里人等は近き内に必ず雨の降るなるべし御山は笠かぶりませしと言ひてやまぬ暁に戸押開きて外の方見やれば雲は低く下りて麓の樹木も見えぬまでに雨はふりしきりて又ゆゑべからぬのはあらず雨降るとの兆は必ず此笠雲の見ゆるにも示めずなる事ともなり

三　小御岳の奥の庭

小御岳神社の西一里半許の處に佛庭と稱する地あり廣さ幾段

十里餘四方に蔓りて風物にも他と異なれり幾千年の老松にいはゞ三百年以上の春秋を経れども直径はわづかに一寸内外なり曲りたる老幹は三尺のたかさまで出でず其上延びたる古枝は斜に地に接して三四尺より七尺に及びさるおがせの垂れたる様など又千古の奇岩は大ひなると小なるとに竪に横に打つきておのづと他の形をなしたる様など実に神仙の遊び給ふ所とおもふべし

四　大沢の石の瀧

大沢とやらは富士山八百八沢の中にて最も嶮峻くして大なる渓谷にて其の深さとかまる處は渓幅凡九丁餘あり常に大ひなる岩の頂の辺より落ち来りて砕けて石塊となり散りて千尺ともなりさるその各々他の石と相衝突して全渓皆石の転下する事絶えず水の流下するが如く其音遠くまで際に響きて凄まじきなんといはん方なし然れども古より此大沢を越ゆるもの少なからずして未だ曾て負傷を受けたるものなきは偏に神の守護し給ふに因りてなるべし

五　異人の降雨

世にはめづらかなる事も数多ければどこれほど奇なるはあらじ長天快く晴れて御山の中にも一点の繊雲だに見へずソヨとの風も吹かぬ迄に静なる日にあたりて外国人の登山するあれば一天俄に掻き曇り吹き起る風と降り出す雨とは凄まじき音して両三日間も歇む時なし村人等は御山は異人に風雨なり外国人に穢れます

富士洞窟紀行

か登りしぞと云ふ昨今は後きけバ空しきものゝ如くなりしと

六　祓師の御胎内

お山の北林麓に今の胎中の形は為せる前き霊窟あり入口の広さ七八人計りにして先ず五六間ゆく間ハ肋骨の如くあり其奥へ入りて九寸余に仏観りて極めて狭き処あり此処を後ゆして又なに降りゆけハ御窟にして乳房より乳の流出るを見る之を母の胎内と云ふ又別に父の胎内とあつかる処もあり婦人に於て分娩の時に当りて此霊窟にのりたる時用ひし襷帷帳なとぞその窟におけば必ずやすく安産とはいへる事は古来より普く人の知る所なり

七　吉田の火祭り

御山の北麓吉田村に鎮りますす富士嶽神社の御祭典は（毎年旧七月廿一日迄）驟の中央に五々皆七さは二間半より三間半及び太さは大人より八人にて抱へ程の大松明を隨所に往古より比并ある大晦ありても人家を焼くの災なく且雲雨ありても火の気の衰へたる事なし又歳によりては此御神の情の中を楽しきたる事を随に方の遅なると速きに依りて一周年の吉凶を十分に知し得べしといふことなりと云へり珍しき大陸の流祭なるぞや

○東鑑

治承四年十月十三日（畧）戌尅駿河目代以長田入道之計廻富士野襲来之由有其告仍相逢途中可遂合戦之旨群議武田太郎信義（畧）等越富士北麓若彦路」十四日遂長田入道子息二人梟首（畧）酉尅梟彼頸於富士野傍伊（デ）堤之辺云ヽ

廿日（畧）左少将惟盛（畧）等陣于富士河西岸而及半更武田太郎信義廻兵略潜襲件陣後面之處所集于富士沼之水鳥等群立

建久四年五月八日将軍家為監富士野藍沢夏狩人

東鑑

〻赴駿河国給
十五日藍沢以狩事終入御富士野御旅舘当南面立
五間假屋御家人同連檐
十六日富士野御狩之間将軍家督若君始令射鹿給」
廿八日癸巳小雨降日中以後霽　子剋故伊東次郎
祐親法師孫子曽我十郎祐成同五郎時宗致推参于
富士野神野御旅舘殺戮工藤左工門祐経

○塩尻　　日華園　玉野信章著

○日本後紀云桓武天皇二十一年五月廢相模国足柄路開筥根途以富士焼砕石塞道也

○遊行者の目に見ゆるはいと恐ろしき境地にて　狂濤風なきに跳りて潮音怒雷をなし　海色ゐるをとゝろく　法眼記せる雲霞ぞ

義教将軍　　富士

今はゝやねかひみちぬる汐見坂
心ひかれし　ふしをなかめて

塩尻　以嵩る

ガラス使用

かくもこし ふしのねを こゝにうつしほ

ふる年 宋世明祖八年 五月末頃の時

以てほ ひのれし ふしのあら

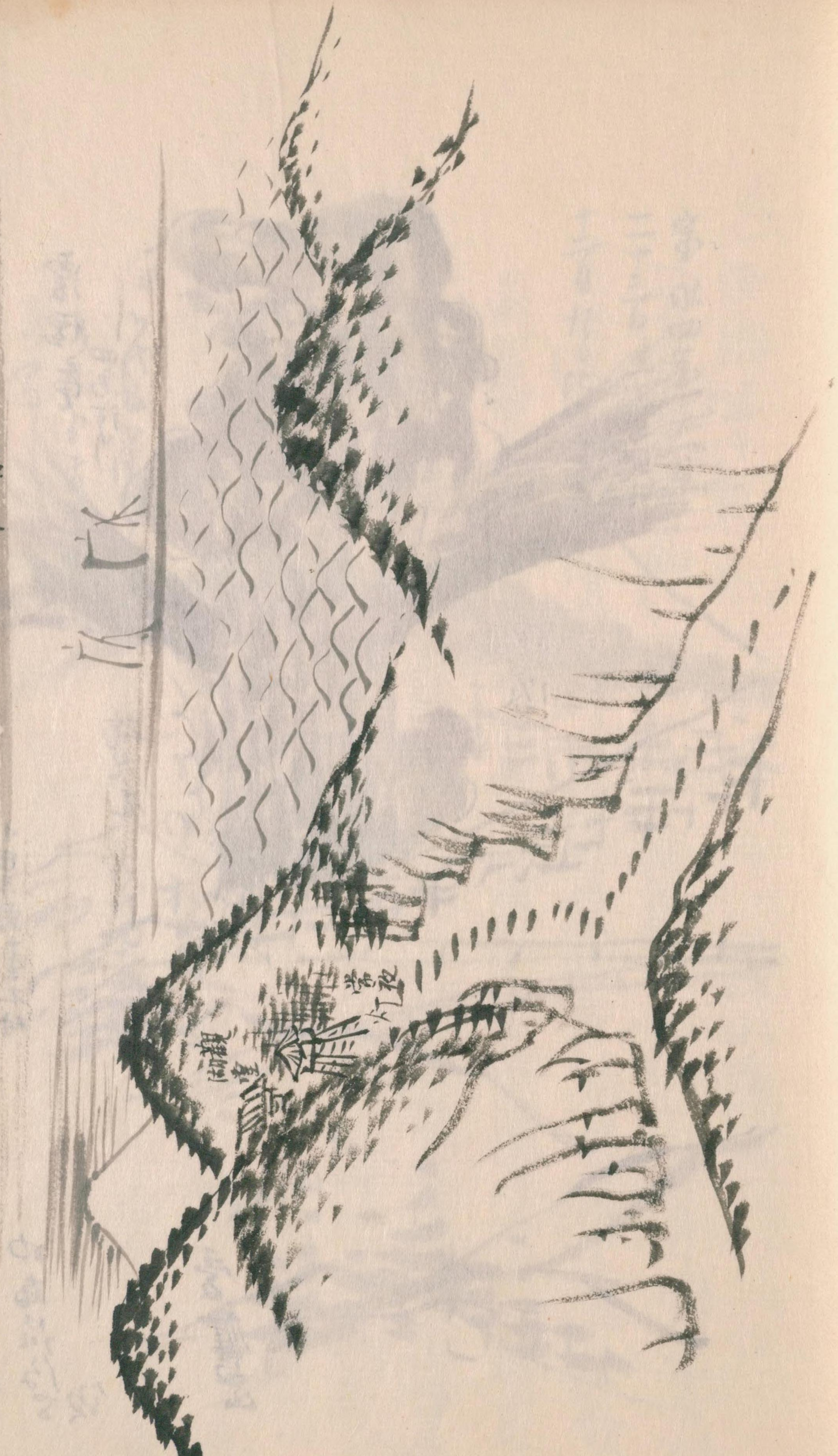
といふことを さしてこれをさせ

享保六年 百の末 頃の時 彼垣に写置し 作り

ある蓋又 其中に 移りし 只写えし 仏像す 又こ

ゆへきものを 彼に年あれば 書へ作りし ほとけに

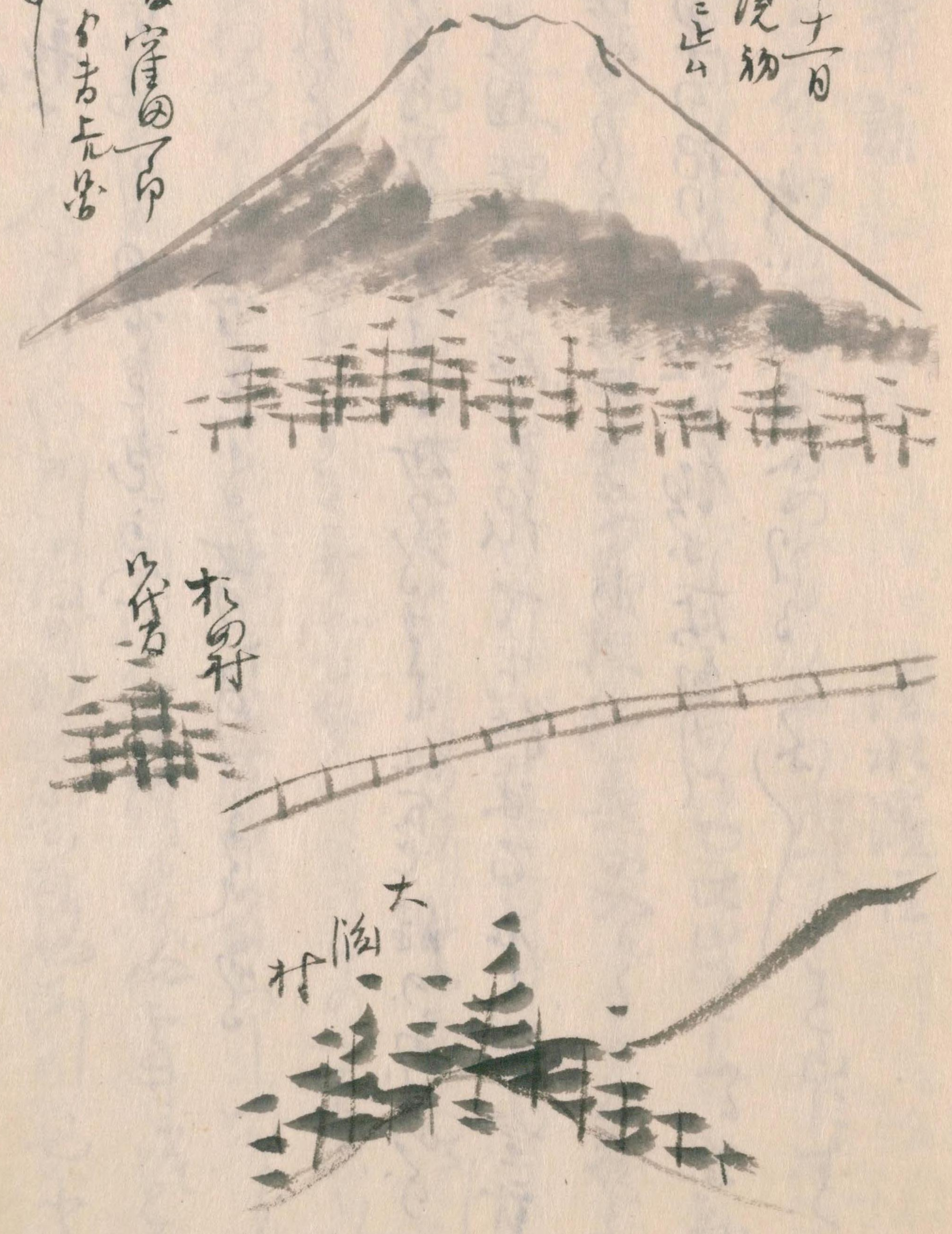
にうつし 後のうつみと 聞き これはつるのて

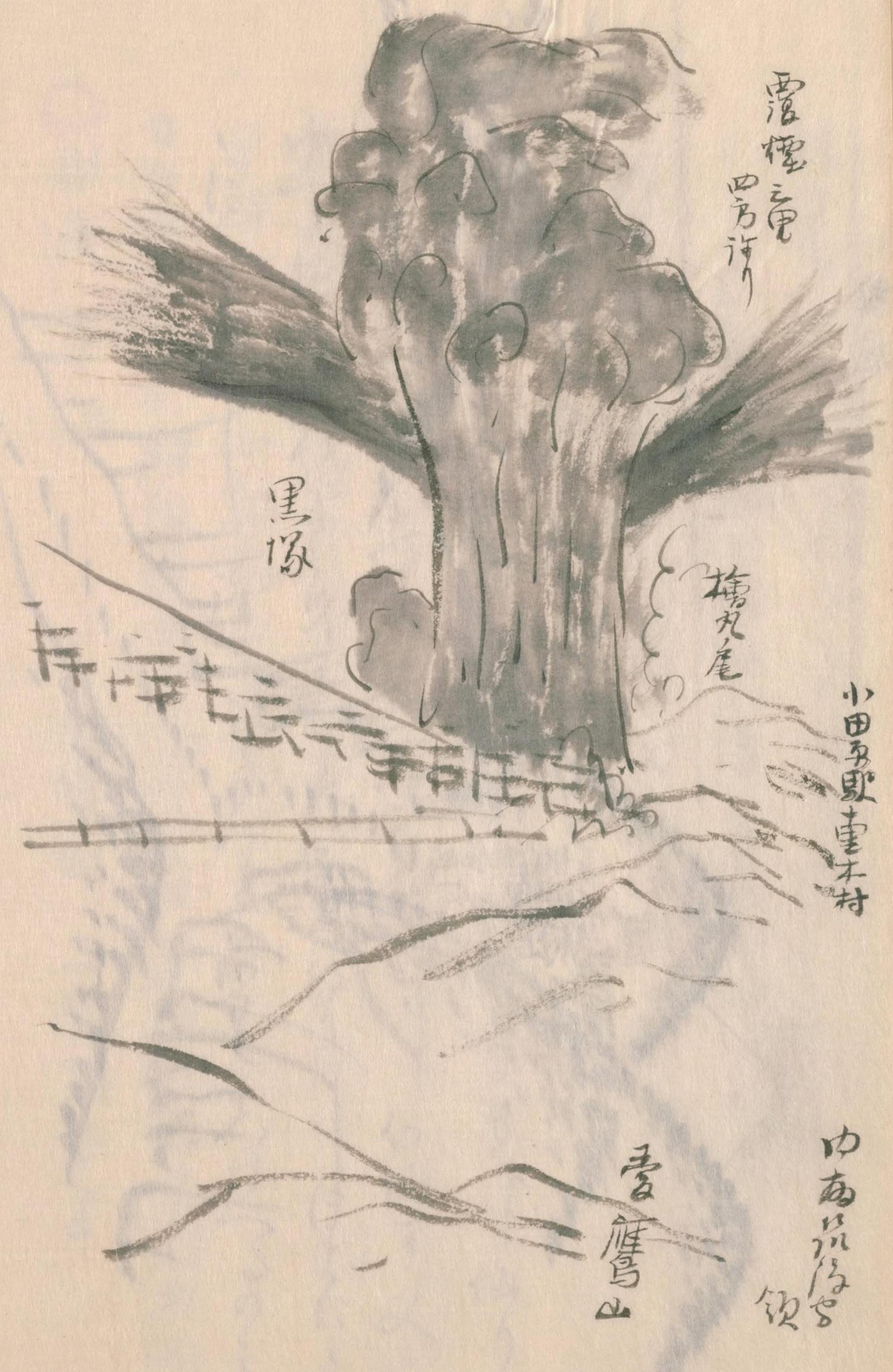


蓋尻

宝永四年十一月
二十三日々焼初
十二月九日比ニ止ム

以代者富田下郎
与米々吉兵衛
の写し




霞煙立登
四方許り
黒塚
檜丸尾
小田原領壹木村
中南筋公方領
愛鷹山

或人の歌に

「晴なれやかりしの心色ゝで
またなるなる世のためしなる

これを慎らばや

「すなはち御代の昔にか有りけむ仕合せ陸のかためが
富士の山国所を降る夫根で下総米百石也地金斗も
て課役のかゝる事にかへ給ひしとある

「富士の根の根領は領に所知りて
余は許もにかゝるらし

○泊酒筆話

清水濱臣

一不盡の嶺はわが国のまづめでたしといひつくしてこと山にすぐれしたることはいはでもいはまほしきなるをあまた此山をよめる古歌を万葉集よりはじめて世々の勅撰私集にかゝれる名歌どもあまたかぞへつくしがたしそれはおきてそれもちかう水無瀬中納言氏成卿の富士百首といふものなり世にしる人多しそれにもあなたにしてよき歌ども多し其の一二をいはゞかりのやどりたてるを用ひたる世中のならはしならんらうたるの草のなかりけりかりのねを聴きしもあれ年ふりてぞ見るありし人の今はいづれやかりのねの妙ふいかの有ぞ思しやる

泊酒筆話

語られ語りもえつきあへぬまでの不二の山と世につたふらん
雪の曙もとらくしさしてけふの書を書出る見るらん
山をあふぐ人にはあらじともふじのねを見れば名だにまさると思ふらん
わすれそはせしもまたつまりと見れはやうやうたどるふじのね
積りしはまたのちふきえけて　けさはなほ月の不二の御空
うつしゐるを見ることなれや　ふじのたけみえることこそた写絵あり
これらはなべて　契沖阿闍梨の百首　長流隠士の百首　そのいづれ
もめでたしく作なからあへりけり　県居翁の長歌雑に
一ためにて人麿赤人まろさく　おそれなしといふもまたずれある
ありけるの也その時の反歌に

駿河なるふじの高ねはいつのちの音する空のふもとに起れ
ふじのねをとをにぞゆくそは足柄山の尾にこえけり
また紀行の中に
この世のちりはちやうのちりにて不二ははちすの花とぞ見えん
三笠とはまうでときく見る中に足柄山の音は五條三位の卿に
× × × × ×
とあるなむその人なるにはあらずして歌ぶりは彼の卿たちまさ
りてこそおぼゆれ又荷田在満大人の歌に
きこしめし思ひよりもまさりて高き山はふじのね
又平忠保が富士百首といふものあり　契沖阿闍梨の百首に

なしつるなるべし　世中の二をいでて
ふる雪にうづもれながら高き名の四方にかくれぬふじのね
いくたびもあふぎおもへど　あかもなし　ながめてもあかぬふじのね
久方の中に月日をうつすなる玉とうながせるふじの山姫
天地のいりきの気をいだく雲のよそにて世をみる山はふじのね
世の中の山てふ山をおさへにし高きのうへにまさるふじの高ねや
月を日をなとするぞの山人のむかふ雲ぞふじのたかね
松立ぬ春に
天の原てる日のかげきらふじのねにそれも神代の雪はのこり
芳宜園の親仲

をね頼みかみのまことのことえききて松ふじのねは雲井ありき
などよき哥と人もいひあへり　吾師の哥に
みなそこに見しも雪ふるふじのねとくもゐにけりふじのね
比叡をまずの秀色そもおりづりしにいふ　文化四年おのれ
伊豆の出湯あみにとて綾瀬の里なる中村茂雄がもとに宿
して松ぶそるれ熱海の出湯をいで箱根山のしるまく
のりしにはや西のむかにふじのふもとのぞ仰ぐる
人にむかひて不二とるくのものあけぼのあふぎて見ゆるぞ
高しなたちるこのにかへしあまさの雲のうちにいるとあ
松いてこの雲はれのきはに其松をしへける
泊洦筆話

はるかに高くそらに聳えてありあふきみるなり　ありしかど

されゆゑにぞ師の歌をもいかでめでざるべき

（此書の不二のかく書る事に古葉中なども父の国歌八論非とふにあり　近きころ或人の論をそのかみのせゐるは論しやをさへぬしにはなれのねとあるは師の一首に　まへけれともそうのかのいそみしう奇妙の事しと中々やうにこそおもひ）

おのれいふてしらへて

よしみ来し事なるふじの山これは中となる言葉こそいひけくのすん

ことくのふしと思ひこゝろ所出などいふ歌なそふは上もなき歌

あはれなりしとせりしは出る歌よりまふべき言の葉なきいひしう

ましけれはこある人もみる此の書に歌まそえそひけり

うたしくの思ひがまへしことなれはかへさまさらを残しひ

てとひけるはものもの時

神代より雪にふりける山なれはいひはつすへき言の葉もなし

きのふけてかきつやりき

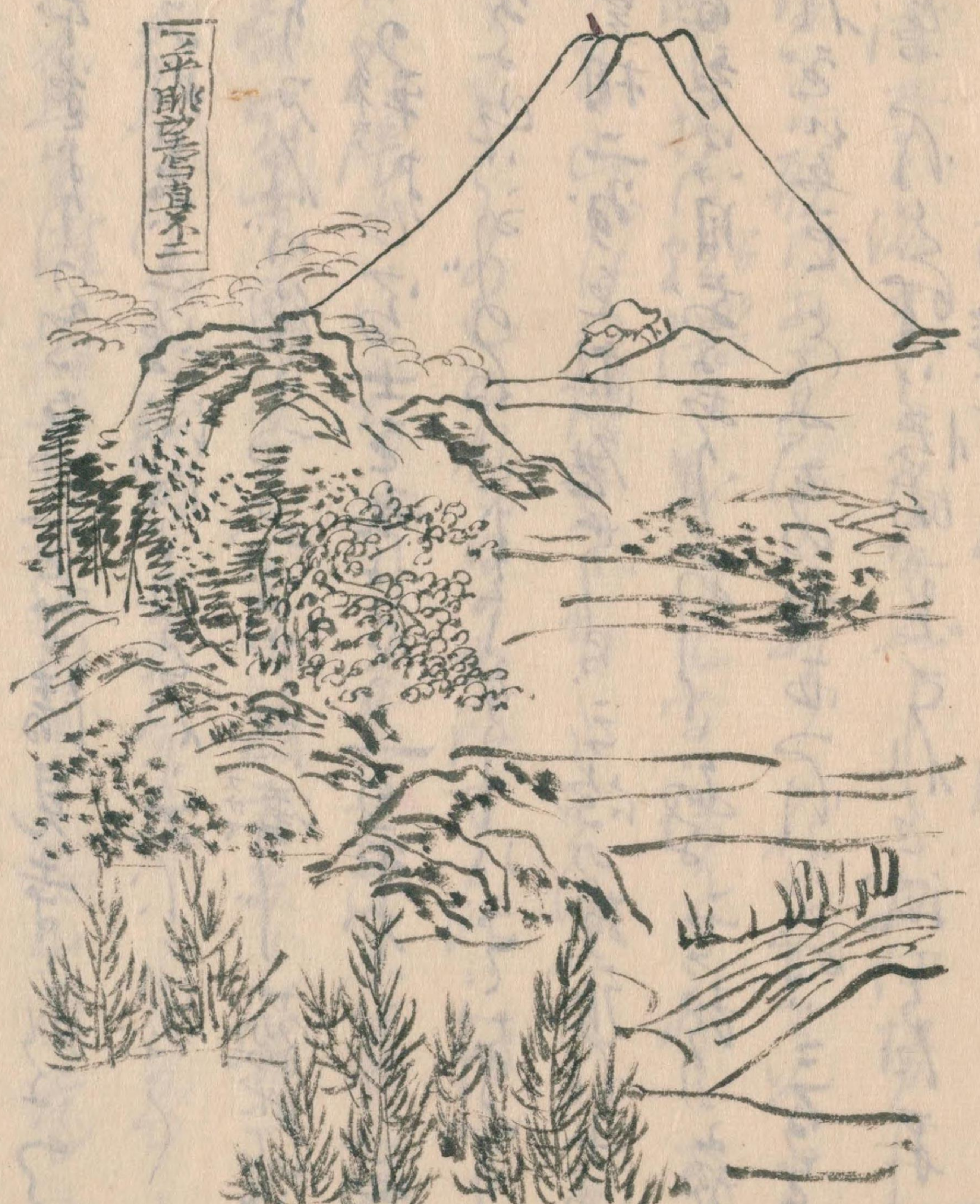
（文化五年夏五月稿）

著作堂一夕話

瀧沢馬琴

富士の農男

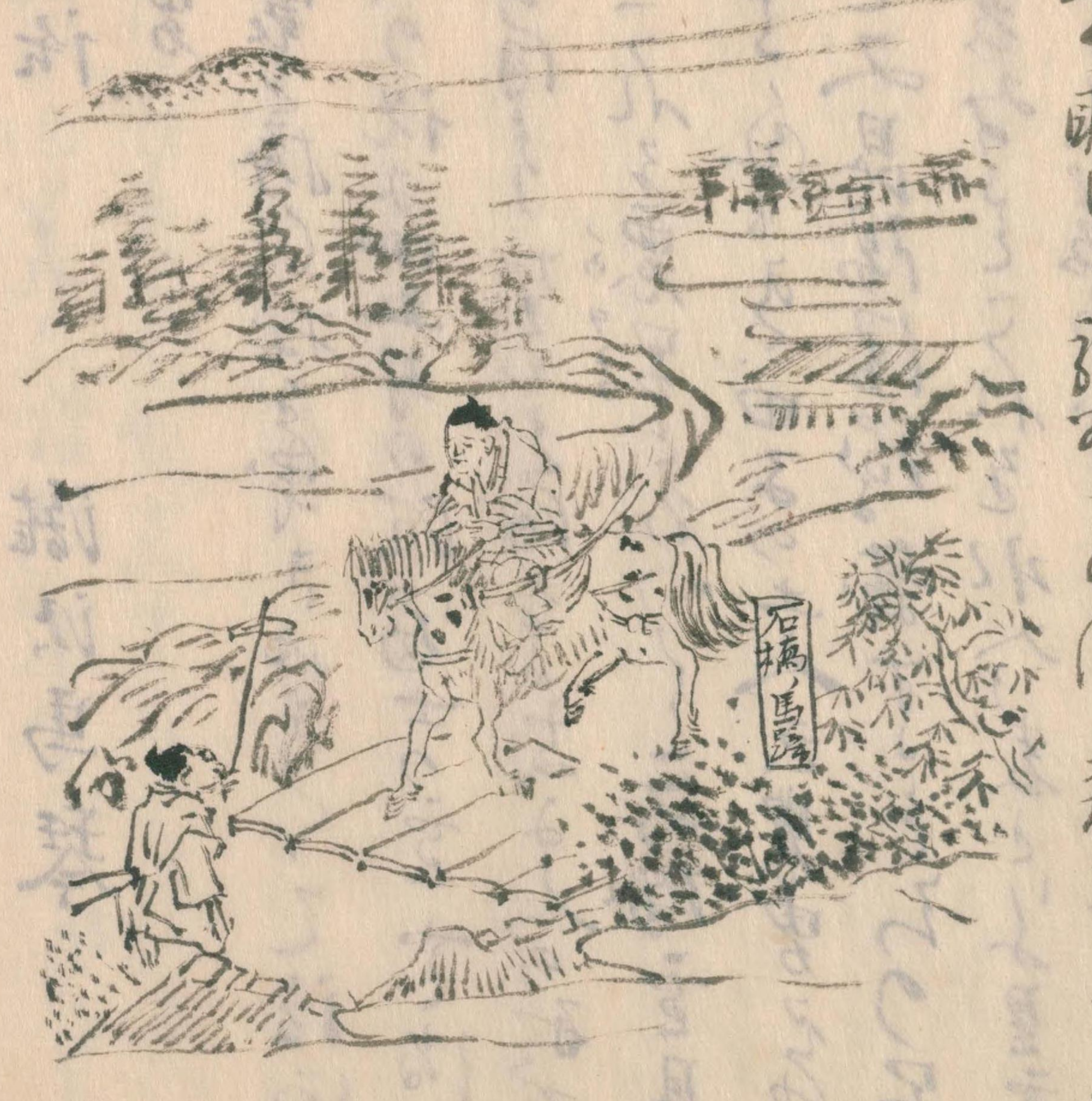
享和壬戌夏五月嚢を携へ杖を曳きゆきて駿河の府中に遊ぶ彼地の人の説に四五月の比富士の雪やゝ消えわたりて宝永山の辺りなとの残雪なる處に人の形めく雪残ることありこれを農男（ノウヲトコ）とよびつゝこの雪を見ゆる年もありみえざる年もあり田子の土人云農男見ゆる年は必五穀豊熟すと又昆陽漫録載するところの富士の根つゞき水田中に麦みするをこれを水入麦といふ是も糞（コヤシ）となりて麦みするといふ駿河人にあらざるをしらへば知るを



あしとりけり尽して此山の眺望ハ殊ニみと（うど）の野土肥村府中

尾花毛の
駒ハ
薊姑萩の
すゝきかな

獨立巍々白玉
壺中天積雪夏
猶寒五雲佳氣
連金闕雄鎮扶
桑万歳安
朝鮮張応斗



より竜華寺の本堂よりみるを第一とす清見寺これにつぐ又其の間の好景、三保沼津よりみれバ大にひきく岩淵薩埵峠よりみれバ絹をつゝみたるやうに遮（サヽヘ）ぎ薩埵峠ハ郊の向ふより一の平（タイラ）まで富士をみざる一の平より西ハ此河の山の上なる山ハふじのねとまがりハこゝにあるべし。余往中年豆相二州を遊歴せしは、三保の歌枕に士峰を賞す松村百条口ハ目おちありあしあふ雲起り嶺を覆ふ土俗これを笠雲とよぶ、其の雲西へ行く時ハ三日を出ずして雨あり東へ行く時ハ快晴なりこれを試るに果して違はず一ノ宮此地にあり浅間（センゲン）大神或ハ富士権現と崇す

大山祇の女木花開耶姫、垂迹する浅間を音のまゝによむハ信濃の浅間と混ぜざる為なるべし又伊勢に朝（アサ）熊（マ）山あり伊勢をハ歌にあさまとありこれをもておもふに浅間（センゲン）なる朝熊（アサマ）ハ共に朝隈（アサクマ）の義にて字ハ借りたるならむあさまあさ隈とかけるハ山ずけの隈ぢなるを目あてにいふ（略）此山ハ隈見ゆることもなしそれハ日の出没するにハ朝にみゆるものなれバ朝隈といふなるべし（略）天正十六年小田原の時細川幽斎富士の哥よまんとて歌書多く携へ玉ひしが古人の名哥にはゞかりて終に哥なかりしといふ又時俳諧の芭蕉生涯富士の発句なく九山祖蒙富

著作堂一夕話

士を画かずとも其才ある往昔の雅を跋し（たんじ）　雅者は
富士を見ざるをいづれも定なきとえんずして画せざると
但しそれが作の深き共に心を用ゆる人とはいはじ

○玄同放言上集

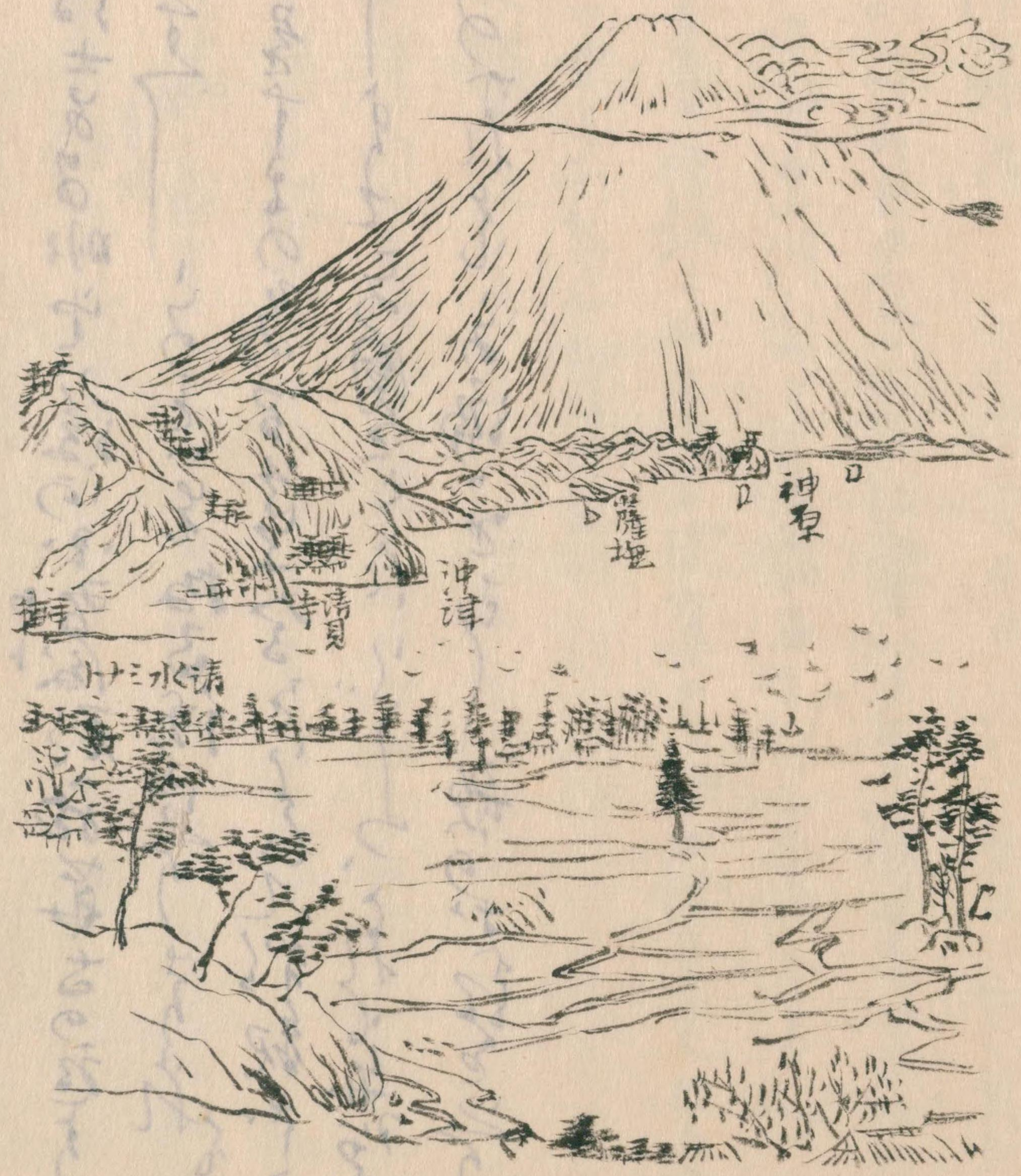
富士歌苦記　　瀧澤馬琴

李花集（上下）宗良親王富士をよませ給ふ法親行を詔書
また題にも其をのはた興ある親王あまりはまれなり
ここより作りしに富士の歌は都の外なるこちなふ地にて
まとゐあつまりしをきなきやうなれども都の人はいとのたえもや
なましいとまづそのひとつあれば出すゆめなどなんにつきて
為家卿への答へつつの存するそれ
見さだかなる詠ふはまれにて都の人はあぬわしのなるねじくり
ほしといふやうにまでとなきえの其の人がありとすくなばずつけてよ

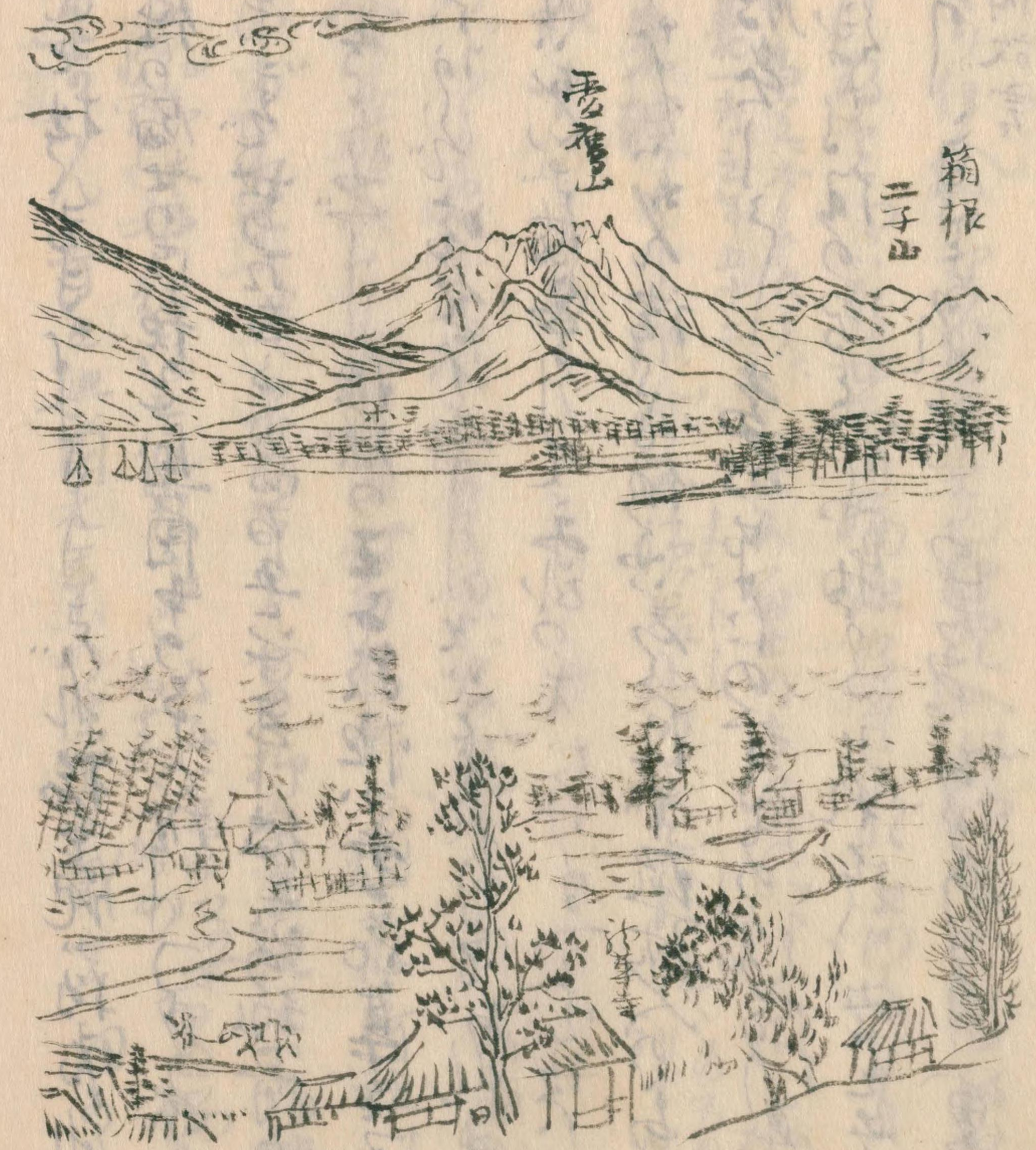
玄同放言

点もハ彼にの佳人給ひけん点もし物也入江御家本書給記
子の所より為定にハ為世卿の嫡孫為定卿為道の子なり
（諸家大系図第六為定、本名為孝、延文五年二月二日薨一書云年五十二）さて其富士の古歌によく似たるあり
明和元年来聘せし琉球国読谷（よむたん）山の王子朝恒（ともね）（この方のめく）訓を唱
か詠める和歌十首あり其うちに
富士　人とはゞいくつばかりといはんまし雲に及ばぬ雲の外の高嶺
此歌当時の人皆称美せしとかや西村白烏軒が烟霞綺談に載
又越谷吾山が朱紫一巻に載せたり（略）抑宗良親王ハ後醍
醐天皇の皇子（征夷大将軍）無品親王にて任ぜらる為子ハ為世卿の女（為定卿の姉）（略）桜雲
記中に彼富士の和歌を興国元年の條下に載せて詞書

を紀録かりにハと抄て書きなしたり　されば桜雲記ハ何者かれハ
いかゞはなし彼の富士の古歌を興国中のことと推しつもりて
明和元年までハ其世のへだゝること四百五十年　彼哥の詠哥自
らよく似たるハ若きにせず　琉球の王子朝恒ハ李花集をみ
てよみたるにもあらで暗合なるべし　それとてもあれま
た宗良親王ハおんが歌聖にて天下の才たけのつゞき世に
伝ふる事の稀なれハおん詠ぶりも伝ふハ知られず琉球人のよめる
哥ハ人口に膾炙し當時都下にのするもの多かりし事
をおもへば目を従もる俗の多くハ不知それとハしらぬ事とする
おきなといふべし　ことさとあれとしこの長等をあきらかにす（略）
玄同放言


神原
薩埵
沖津
清見寺
清水ミナト

於龍華寺庭前
望豆州圖寫之


箱根
二子山
愛鷹山
龍華寺

附けていふ太宰士峯の眺望は駿河国有度郡在草薙村の辺より
観る図を題として　こゝといふも稀なる佳景なりけれど
其あたりを往還するものゝ其写景なることいはで形観さる
あまたなりぬべしよりて此図をとくにいふしつゝこれは無隠
しむかきものなれとも此編には歌のおもむきをとり

ろ
4、10、4行

○伊勢物語

冨士の山をみれば五月のつごもりに雪いと白う降れり

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿子まだらに雪のふるらん

その山はここにたとへば比叡の山を二十ばかりかさねあげたらんほど
して形は塩尻のやうになんありける

○更科日記

冨士の山はこの国なり　わが生ひ出し国にては西面に見えし山なり
その山のさまいと世に見えぬさまなり　さまことなる山のすがたの
紺青（えんぢやう）を塗りたるやうなるに雪の消ゆる世もなく積りたれば
色濃き衣に白き衵（あこめ）きたらんやうに見えて山の頂のすこし平ぎ

ガラス使用

かいの国の話
ならん

なるより烟は立のぼる夕暮は火の燃えたつも見ゆ富士川といふは富士の山より落ちたる水なりその国の人出て語るやう一年ごろ物にまかりたりしにいと暑かりしかばこの水のつらに休みつゝ見れば川上の方より黄なる物流れ来て物につきてとゞまりたるを見れば黄なる紙にて濃くうるはしく書きたり怪しくて見れば来年なるべき国どもを除目（ぢもく）の如皆書きてこの国来年あくべきにも守なして又そへて二人をなしたり怪しあさましと思ひてとり上げてほしておさめたりしをかへる年の司召（つかさめし）にこの文にかゝれたりし一つたがはずこの国の守とありしまゝなるを三月のうちになくなりて又なりかはりたるもこの傍へにかきつけられたりし人なりかゝる事なんありし来年の司召などは今年この山にそこばくの神あつまりてない給ふなりけりと見給へしめづらかなることにさぶらふとかたる

○十六夜日記

富士の山を見れば烟もたゝず昔父の朝臣に誘はれていかになるみの浦なればなど詠みしころ遠江の国までは見しかば富士の烟の末も朝夕たしかに見えしものをいつの年よりか絶えしと問へばさだかにこたふる人だになし

誰方になびきはてゝか富士の嶺の烟の末の見えずなるらん

古今の序の事（詞）まで思ひ出られて

いつの年の雪とかちりか富士の嶺をきえさへあらき山とありけん

くちはてゝふミの橋をつくりや富士のゆかりしたゞずありあれば

今宵は浪の上といふ里に宿りて見し多る三日月を見もあげず

○海道記（貞応二年）　源光行

十四日富士川をわたる此河中に石を流す巫峡の水のこゝろあらんれ舟をくつかへさんや人の心は此水よりさかしけれは老たるをたのミてうちわたる老たるくるしみちは船なけれは山路の雲のよそにあらは川のなかのものゝしくえりみえり

音にきゝし　名たかき山のゆるしそれ

そこしらぬ深しミし　川の水

うきし命の泉をくみくれはわいらきしますとゆかれとまきは海中といえとえす理経といえつゝし　菩むかし菩薩行けるのにそれは人胴斤をと聴てみつの利檎経をつかへて備さる

うへし あしがらの麓は なお竹の下にあふぐ 村雨村里の後に
こゞ山あふみゆる

松のつぶある人にはいでのかせん
うきあらふふじゑるならむ哉

ふじの山をみれば 都にて空に聞しにまさりて
群山にこえたり 峯は鳥路たえ 麓は獣蹊かよふ人跡往還し
ならべて ひとりめぐれる 望は 孔中に聳り 頂に雪積て 実
なり 夏は緑葉の色 徳斎りて長し 高きことは天に階
ぞえり 此山の 見てゐるもきこゝは 雨雪に日をつもり
こゝよりの山を見て行く 浮島がはらに浦て 池堀をなした

ちる池塘に湛て むかし河をなす まことに此の山はるの
うつほに雲霧山し 雪山ともいえて空あて東海の横に寄せの
なりゆくんの神仙女の貴態は松緑をもとめかうけふきく
見神の巣山は 松の木こではまあなめかる
むかしは仙女が此山に住てひく 書分り東みやこに新山と（山の頂に二泉あり 湯の如くわくとぞ）
ふじ山なり 延暦年中みて神ありてこれをつくるといへり
此花はて常の中に神て人宿の外にまで眠をいたしきて
玄説虚をも見けり

いくとしの雪つもりてかふじの山
いたゞき高くなりたるらん

昔見つるふじのけぶりは雲に消えて

海道記

くせにおもりの重うけれバ川
むかし採竹翁といふもの有り女を赫奕姫といふおほくのよし
の世にうつくしき眼る驚かして華のなきの子行り翁まゝ
ることせりひとをなりて都まてをたてひろし声ありて傍をてらす
嫁婚する為には様々せんとをねり宛転する双燕はまとみの色、一
に喉は今のこびこえ中人情をそゝぎぬ比姫はそれお
ならして姫に申しなれとりけるの てよたに生れて後は和せの
思を捨せんとてゝしくも翁が世に化生せるし ありける
おもの捨りの仏もし為せずることとこれより て末代のよの中
黄金出来て翁たちまちに富人となりけりこのうち花の
赤好色のうち月に光を争ひ雪光色をまして艶言をつ
く記懐を抱て来たるやひめの室屋に来寄して語を
しふ音を許して通ひけるされども翁姫難題を発して
うちとるにはなし 時のこうとはのしをきらしめて
めいれとも集まりけれは帝は時あそびのよしにて営
姫が世に幸はすしきまいて祭るの装をもよひ松の形を
ひきゐる翁姫を所見て後日を契りけれはみてうとよし
なりのひぬにつへのこれを知て王の松家の紋たまさいまう
るなれさるまた夜をまくりて天子あのりぬ闘体のうゑ
の跡さもきなく 精士が力も及ばずなりし 時に姫は

は月の宮へ帰りぬ　程すきてしか[illegible]そのおもかけ
今も物な思ひそ別し君の色玉の情は深く袖を流す
彼雲をつかむにつなき得す空の色情をとして是の色聞
月を追てもおよはす風の声をきゝて夜のうらみ深し
華氏（民）は栄木の孫枝にし葉の君臣として万民病をいやす営
姫は鶯卵の子孫にし毒の化女として一人の心をなやます方
士の大王は使を遣はし寄姫のさためと二世理章のおもひに
うつり仏国の富士の嶺のかはり仙女のわかれの恨長く
和君の情をこの世に溜めて不にかへりける時二帝の旅
りまつたにおゐて不死の薬に死をまぬかれてとゝめおき

ある歌に云
今はとて天の羽衣きる時ぞ
きみをあはれと思ひいでける
このことばをのこしてわすれかたみにとゞめ
それ思ひかねてすゝむるをとりし隠れをあきらかに
くすりをのこしすひかりその[illegible]
あふこともなみたにうかふわか身には
しなぬくすりもなにゝかはせむ
使薬と歌とをあはして天にちかきところは此山なり
ありとて富士山の嶺にてやかせ給ひけれはくすりのけふり
海道記（光行）

いふりともすゝめられて帝のくすりこれより此ころ有

富の烟をたえすり仍此山をハ不死峯といへるとの事是を難の

名付て富士といふ事や或仙女しこれ仙女しとかに恋

しき神にたまれる御は翁てまうこれいはまそ傳るおかしくおて

独の秋をこえす語て昔竹取翁女莖を作けん人をなやます

詠んて色にみゆるつゝれ

　あまつひめまし　おもしのゆふりとそ

　なかやをのなき大空のやく

なかてとりとらぬすとらすとこわいて悔郷のうちに

ありてけ人そとあけるもの敷文猶母の間なかいなるまてあらす

とも深のゆくてとおもひん

○富士の雪に浮るゝ
うきにしまて
はやん山陰
もそれ雨き
宗碩

宗長手記　釋宗長

○一両程随訪田沙門出借用して帰りのおりするとて

あまりに不物にて或一軒つゝみまつりそへた

外への富士きこえの河しの海の

　此方風いゆかりとちりしぬとそ

○村中み帰りて京より旧冬の人の名みな見付

　さそはれて都の河しの行の雪

わい此山さそれけるとものなしハ都の河しの浮の雪なれん

宗長手記

とまりけり」

○東麓なる作る清水保徳つくらせたるを富士のかた一把
たく人の通るにひつかけ侍る
なかくふとくするものかけの
こゝぬまを出に近いかり川
保徳のよし
近いたてける富士のかた帽子
たてぬまを見て見しまさらん

○二月廿八日五郎瑞仙奥州に
下向せられ露の西方の如の去
すその山をたちくて申侍り

うひかねい雪
しら嶺くらし　宗也
なみ時鳥月と
ちりの宿かり　宗也

○大永六年孫猶かれて二月廿八
てつのちかしや露の四方のかき
の境か金鍍院へ旅ひかくもせふ様にめて来
臨時名一桜のもよおし露ちてのきかそまた事つけて
あら白をかりおかれけりし」
あすねいかげにかしのよもいき時る

○女房艶詩合　作者不知
人のまに撫て社みひそいつるかしのあらそしらぬかり
もとい…ことえてそやよしらちのそのこと

○長明道記

蒲原といふ宿のまへを通て猶ゆくれぬるものゝまちほんとしあるに立入る隠るなきのかきくもるをとへれば

旅衣する野に誘はれ世をしるかにほもしる冨士のね雪

といふ哥なりし心ありける旅人の志ならずやあはれにおもふし雪纏岩の桂葉に積をしぼる隠すあり冬の雪まにまぎれをあまで峯の雪をのがこえり今は冨の山みあかりに宿る旅行客ありさま秋ころもをかけし頃其山の雪思へるかれこそもとにかすみもおほね也

此ゆる秋は誰にあふ計る山にて時の雪を思ひやりけん

田子の浦に打出て富士の高ねをみれば時わかぬ雪ならなくて
いまだ白妙にはあらねどあをうして天によそほしすがた恋の山よりも
たかくおぼゆらん　後　貞観十七年の冬のころ白衣の美女あり二人
山の嶺にならびあそぶと　都良香が富士記に書るいとめ更
しといふべきなり

富士の根の風にまきてよふ雲路て消てあか袖とも見え侍

○身延道の記　元政

廿九日つとめて萬性を出つきの子島なりけるはまにて富士の雪
見し日おふさの御山雪みれは久しくなりけりといへは又人の
書雪みて眺れどと云ふ事なしといふに峰に一むらの雲も見へ

む山のまへはうつくしく際なききたなによく似たりまた海
道よりみえるははまきはり所のこのみえるは不二は甲斐の山吹
何事其いへ川のこなたに見えるふたなくておのづからはまさりて久しと云ふ
際にいふめくなりおのれさへたびたびなりいよく見しるはなし
おもふすいわれなくやあるらん

この世まで心にかかる雲もなし富士のみねにあまる手ならう

身延道の記

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

○春の深山路

（弘安三年十一月）廿四日富士河に神つくをみ侍るとて
いとくらく流なしあやし世の流れなる中に
小家きうしありききのしゐとれば出る（男）との
かのとは渡るをまつ間どすこしとれ小家の内に立
入るに侍りかきられば紫をりくへてつくしとゆしの
むかしやりてみる叶ふんぞあることにおもひつくりれ神
の宿りけるにこの神かけくりればこの神の本地は
それかくなんいふにちかふることやかなふのつるする木は
の翁の物語せられ申しの葉をもち出でてききたりけれ

（春の深山路）

それからをしらといひみちて傳れど 確證なし 山のおや凡そのかしこき山は天人のあまりてつきくるよし 富士の頂にてえうりいとあしきたるまし あらねともはふとそ天人かゝり侍る

廿五日 程深き月にたてぬる山そのうちの日出る程になるをね見ましかバことにいはくの光やうたらんどかゝやき日のめの程に姉しのよし九つのかたの姉りけるいたゝや雲井にてもる高き程なれど 是もて日てる山の高根をならす時じ 是なるの積てろ精して 山のおもてとなりたりし 詞ハえなるみ雲のてあはいくきせり こちてくりくるも富士のつかなより下は海をそへたいきしるやいくはゆるさき山とはよそにいはれしたちへバ為りし 比是様のりつくしとひんましりのかたかんでひしあるいとみえるの比叡の山 廿許り 重ねしんやうちかくも業平のかゝれるはあまりにやあらんまして五さ程 なる歳ん 為あかし 此るあふよしくさんはべりた山を花高 三四段アれいはるらんのし

ガラス使用

○室町殿伊勢参宮記

（応永卅一年極月）十八日の夜あけゆく程に宮田をうち
侍る、おりしもゆきふりて、いづくのほどぞその富士これさとりみ
こえ侍れと、おもふに人の目をゆき侍れもおいたえ
ぬるまでの　と覚えあづぶしきみなふいきのよそあはれ
きこえ侍るやうにきもじとやうて人の袖をはるくのゆめの
けれせんじ見る御供侍れば、ほど白雉えころりあいてつやく
見え侍らば、さみを割をうろすへきまいらせね、又せうくるま
あんとまたにも冬まき侍れさいしきえ
へいるそりふいつのこんぬかりのねい
伊勢参宮記

年たのきゝするころは侍りけれ

猶これあるのゆりしきの降るみやりけれは深くし有

山はあまりに見えたるに雲のつまりたる山べまさく見えて

侍るありしがあれたゞこれをまさるらしとゑひなして

いさやんと詠る

をはとみえしゆやいさなくさん

ふしのね粉くみ雲の山のは

富士紀行（扶桑拾葉集）

釋尭孝

七の道は海行りハ河の路は静かにてよもの世まり云ふことをやまれ侍るは旅の行きさりる事となく第北氏くるをゆけるんさしるとゑんとせしぬれハ伊勢やあまさるをも心とけるおもしにおもふる御代に抑侍る夜に富士御らんの有増まとをされ侍りしく永享四のとし長月十よ日の乃ことりたる立は侍るとおしし秋の日浪海侍るくて時るとみえ侍らさりしの御立の暁より雨しの空のけしきもみわかりしのとや、のほりしてうけしく有らしくみえく侍る

御きみ御はたのひかりも寒ゆきなみろふしるはらくはるゝ高にふ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

逢坂越侍るとてせきの明神のほとりを

君か代に逢坂やうれしきゆきゝはふさゝれぬせきにせきもる神ぞしるらむ

明方の雲かゝりて三上山の見え侍りしの日おもひやられて

はひさ川なる日とやき作をちく三上の山のはれゝる

草津の宿にて

あふちやほれたる茶は茶のみて北ゆく路出でつくるに

やす川のあたりにてかれをおもひてまちまちて名にふつとひ法

多り

その昔の民の人にやす川にふしねくのひのりをそまつ

今日北方に向りはむさの宿にてあまる（都より十三里）ほきの日数なく

山のまへと申所にて侍るとて

月に妹さりふゝるにゆく影のやまま見えしのゝ冬空

四十九院の宿にて

四十あまり九のほとり此里の名はやまとを菩薩にいつほおさゝし

犬上と申あたりにていさや川いさゝくそとふ事侍れを聞しゝに

答ふる人もなし思ひゆくてに山川のあをなに見えくる所あり

これなんかとおほえて

いさとふ名になかるゝ川をとや犬上ねの川の名頃

小野代宿にて

吹ふけりる御神の誠しにそまむあるしのをなみて山いうせ

冨士紀行（竟書）

ガラス使用

まわりはるかたら高杉ゝこゝも立ては雲ゐ人里たへ一つにいろとるも
山みちつたひおりくれはちるふかくみえて見え侍し
おもしろきよそほふ旅のもろ人衆袖まりけりの山の、高木ちりて
不破の関すきて侍りしも見わたしし古き関のあとはうこけのし始
うちて中山みところあり
今須をはしよりかゝりて二三年のことゝいふ不破の世をやつ
たる井の宿近くなりて
むかし見しかけ残るえ人の丈やるにおふる井の水をむまん
おもひし帰とはなりて
このやまや松たつ一本のかけにしもるひとのふめる千代のあきゝなふ

十二日　杖をこえくてあゐ川と申ところをわたる程に
まくらまき世にあそ川の岩根流をゆくこゝろおもしろさや高き
呂郎のたはふれのやふ志つの𠀋のえたのふきこゆ
かけのたち郎のはしめあそつらくるあそえ﹅ぬる書あと﹅みて
赤坂の宿にて
松かさ峯の梢のあの(?)小袖かりて人こそいそく旅人
みちすゝのふとはみえ侍る人のもみちそいふほとゝいのみなをおく
日侍まし
かりみくるは袖あさをあまる恨めしくぬる侍るのやまちみ露の行衆い
いゆくてはるやらん霧なるゆへそふく伊勢はたのかゝるへて妹

ガラス使用

のそらさへえんなるに雁つらねてとふ
秌さむき田の面のいなえかりおさめてなく鶴も湖辺の宮さかりのなかに
くみせ河わたりなとて
多されはさりなとく河水の人舟せいと見えて舟やほふらむ
なうけしときこゆはんふろうさくとこわされしるなにや
ねあらぬみすし長はしあらうくてつくりうしつくるなたつかま
也を過の町をとゆ所あて
藤枝の過すゝむ町や秋をこえてくるりほく人て袖やさら三本に
去れまつり川は舟におかこの多所の河あり河の中をわかつ伊
くて海つるそのおちし侍り舟はしはるかにほとききて行く人征馬

ひまもなくあまた木のかけとなりゆくしらく遠のおもむきなとおなしゆるかし
又河辺は渡舟うちかへしくかわりうかへるわたりなとかはらにて鶴の翔
舟路をいえへ河をも一もとせ小山陰に将来多き沸地の鶴舞
秋おろされかはらくをめて氣色はうりはのうきまてせられ侍
乗きへそ落なれやうにおもしろきされ侍るそれすはかゝはゝの葉
てらさんなる侍らぬわすれなるん
峰つゝきもつらぬる紀まのきこえぬは京の男手子はかに心して野別
おもひ出る過しきとをわたりつゝ分す都の隈あら舟り
康七国おもひ川あて
我見のえくみやとまくおもひ川ゆくさに見えるはの音のる

ガラス使用

扨津乃國とまを（ある井すゝ十里）さいりの川といふ所を過ぎて熱田の宮の神
前にまうでゝ御造営ある紅補とふと申侍るむかし日本武尊
東夷征伐の為めこれさらむにむかひ給ひし時よ此の道し伊
勢大神宮にて大和姫命にまゐらせ申さまし〻に命のまゝ
つゞき給ひし寶劔はこの御社すゑまゐらせおつかはしなりと
やむ事なき神明綜覽玉藏のちなみしたのもしくおぼえ侍
りて
行きかへりの人みあつまりの宮はすぐ由川をやすらふ旅の行かは哉
ありさまみて草紙まきを取り繰りしきりて世の末の海ちかく
蓬莱の嶋とこそ

見る為たえぬ果てまもりけりと島はなみやしもきの鳴めぐりせん

那古やにかゝりて
わきさりふしてほさしくなみかゝる残きしほひの時のけしきは
あつたの里この所々のしとおもひ出侍る
むかし我はいにしへ熱田の里子として又あつまの孫客ともあり
さぶらふにはふかく守りけり侍りてはるかにとめてふたつの山あひを住還
とおもひ出されて都に旅に出るぞうて年月おくれて侍し
鳴とゞまるやでゆのせきいはぬ旅にみちのく旅にまよひけるを
今もまた三教あるも名なりおもふ月見るのみきこゆるや多るみは富士の
根さしこれをといひかけて申
（富士紀行（堯孝））

ふしの日ふまちこし逢影をいそかてこゝに名ごりの月をとめてみしかな

象潟も浦さへ清きをとめ山出しの

月の名のまちかねるはゝるかに遠き西に往川

やはきの宿御伊りあり（おりはより十二里）

三條相公羽林のやどりまうで侍りて飛鳥井黄門など題をさ

ぐりて哥よみ侍りしに名所路月を

あつまのへ路はわく東路やいく夜ねくら月にこえけん　雅

名所関月

わきも川よこ雲ふかくらし杉揚も月やたえんるなんふる関守

名所橋月

ゆふてらす近江をえ来てはしにはるかにまてもえたる月のかけ

寄月祝言

伊勢のあまてらしの我君の代もおさまりしやふるきもつ月の光をかゝけ　雅

休さゑて此御とまりを立侍りて

ふるあるやはきの里はひの朝おりおいて其名さへある名の

広河のさと申所にて

名れの侍るやこのゑつみ志かにあてこゑて清見の宇波川の里

山中の宿より御あるさ秋は杉ふきわたしきりかわれし

旅衣あつ川をもおしわけてゆくえはは山中さして

峠こえに世きやと所あり

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

道ひろくおさまれる世の関口はさすとしもなき関かし

命に惜とや申る井のかそりも今身

君まち契りはあれ共はそやらい隔てくだりあとやかれ之

今けふの御とまりにて（やをたより　八日）あれに明行月を見つゝ

秋ふかき月すみわたる今はゝや明そ久しまで立そやまちぬ

十五日大いなる山とやれぬると神をし給ふあかる嵩んくはりか

ある嶺は普何再現大士まで神はしませと申侍らには志はし

法施をたてまつりし侍

君か代はかすも知られぬ侍る石みる大宮の山とふるまで

二郎山錦侍りて

染ぬこゆる二郎山のもみぢ葉みちまさいろこきかへまさかこん

花のさとはあとりかれ侍らん

名にたてる旅の夜の里おきてつかさ染る袖やこそ袖下

今日那ん遠江の境見坂行いくほとなく京都なる

かほはゝ染やんとのはも那る帰を京直たそこゝおろせむゑは花ある

しかるへきの富士うつりて雲の煙、磯の煙などこはらとなき海の

みどりの松の梢はるかにつゝきたるすさき梢も名に負ふ

に磯なる小舟をえ所なるも雲水たえたるおちこちの舟の

ほまれある心あはれにも侍りこれまであらんさまかる恐れある

御詠二首

冨士紀行（堯孝）

今そしるやね、ひみちぬる徳見坂たゝろひかはし　富士をふゝのみえて
立ち西りいくそ那とうちのはまりぬれは坂よりえ富士を見ん世を
うつし〳〵まなく此程を半るへきとも御事侍りしは
ちそ様ふ歩くかはげぬ坂え坂峠ふこゑるかしのうねは
君ふ於て一万代とゑくおゐゆへきゆぬの身に此そその面かげ
こ子つゝとや侍り何まて富士を御らんしるあかれさるにも御ふ階く
なくひるき那を見るむる道の気残こそつとはいつていはます
おほふ律は伊く天中へ侍りし
験ありやふりうれての二百のあくかりかしをあとに見そゑぬる
橋本の御を渡り（今はしより五里）ちくなまり侍り濱名ちつしこれありりに
ア越とや残さゝ海
喜わかるはまなのはしはきぬこゑて成来とり秋の河原
十六日は小とを立て了鳥の前なりしもなかぬひくる路はこ
頃まとを忘ひるは侍るふ遠江かはゝへるはいりするをふゝの
何なれる程をつけ侍しに生れ来りとあげ
ある秋くふ分けそまつる虫の聲の袖をひくまの野の花つゝや
踏坂山にて
打はふきやひやともんしらとも佐夜坂山そやすく越ぬる
十七日遠江府（はまよりより六里）残立ちて今いくくはへらしに懸川
と御所にて

打わたす根之神にのまへ川やいとゝぬれそふ我身なるらめ

さやの中山にて出され侍る御詠

名にしおへハひる越えなん夜しハ渡あまくものかゝるさよ中やま

おなしくなら侍りし　御和

あまの雲はれていつるみ言葉我身此ねよりこえたらく一夜こえ不知

おなし所にて

あまくものよ所にみえては峰のねはさやにも見えすさやの中山

十日岡部の御とまりを立て宇津の山こえ侍れハ雨のなごり

いとつゆ深かりしに

うつのやまうつゝつらしはやてたえなかくるつたの下みち

ゆふくるゝころ駿河府に至り侍りける　千里始足下高山起

微塵ためしおもひしらるゝに侍り此国の守護今川上総介範政

御旅のおましかさりおきちけいめいし侍るちらしも雪のつて

ねんすゝめ盃上談にふるく侍りハやと祝んしわかりにあまたあり眺

目のまへは山の雪をあふく今ゆしもおりにつけてもけしき富士権

現には我らの御光残まちわひしる事えてはや志を

たゝよくきおほく侍る山また山をかさねて一天たふしてこそ見ゆる

こそより上りかつ登ききへくのまち迎定めてひとく不枝

日ころかすかなるやまの雨もちらしめてぬこの里にさや木

我君のたかきめくみにたとへてそなほあふきみるふしの山

富士紀行（堯孝）

これまで二首よまれはされ侍し御詠のうち
みそはいりておもしろかるべきものをおほけなくもとかくもてまゐるを

この御和

その言葉御まかねてけふのねがひゆるしや君の千代かけつまし

またまた月はやく伏御らんしあそびして
月すこし一方ならぬなかの久しかりおぼつかなき秋の夜半の秋
おもひけるに御和歌をきかせ給ふ人々に御詠を侍ふ時と又所事のいとも
しらくて

富士の根や月をもてその目ころもあすめぐしきみのとよゝふ

翌朝の御詠

秋あけぬふじのねおろし身にしみてわすれはてつゝふるさとの衣

終日かげさすまちふじのすそ野なるゆきもけふはいろまさるらん

又御和

雲はらふふじの山あらし吹やるもあきの朝気色みはしきも
なかぞらの雲もなかなかよ終日かげすみわたるふじのたかねに

朝まだきあけたるとき一首の御詠をほうしを共にかき侍り杉本なにこの
わりくて一枚かきに二首の御詠をほうしのふかかへしけるを御かへし
ほうしにおほし給ひてふみまいらへて
日をへてなかぞら秋はすゝふじのねにやゝほうしにあれるゝに

御和

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　ガラス使用

ふしの根にかゝれる雲をはらふ身の今の世をいとゝやすくはしらも

又御詠

山川とわかれし流やよそにまふ川乃ふちにはあらぬ身さのみ、うらみは

うれしさは又なにしあらはふしの根をくもの衣のかゝるなりけり

同御和

山川の流もいく世のかりそめに今こそけふ仰きやすらむ

ふしの山や心のまゝあんはいこそ照す一ッの神祇ありとて

此山の由来かねききし見し斗其わかれを一つの千年とみやに出現

の由守護任申侍りむへしの女子相模帳寄特りおけ

記させ候事

天の岩戸も神まてひらくとうふ雲あふしの高ねを招やあらはん

あまし給の道筋もまことふしの高ねのみの見ゆる中よりとふ言の葉に

御和

君之山や伊万代の富さらは山のふしの高ねを仰き見つる

富士の峯の雪とき言れまてつやきゝし心はえることとふ富

山なみもはるかなる見え其詠おくまして

を出ては月まてはまて夕日せけ奉にうつる影の高ねに

たいまの御代の移をつくらまつらせ御事侍るらし

白雲の高ねはつりはさだかにして心のよふしの山の端もなし

廿日清見寺にて付記しけし此時もいと御詠

富士紀行（堯孝）

関の戸はさゝぬ御代にも清見かたなみそとまる三保の松原

御舟ゆるされ海の荒き浜義する所を御覧せられて還御なり侍

寿仁親王春風秋なる御よみはしまりまくまゐるも

貴賤御道すからの㕝さまも何思侍るまて入江荒磯なとは ふ

気色をすほく、隠手降山なとは 孝子の神飯真陽跡

思ひ侍しありし孫月二年といひけるこそおもへ侍る 清見寺も

おもひ出て奉納侍し三首

きよみかた開しもいつもあはれやみなの松原風たゝぬ世に

二首翁

祖師の法の鎮出しこの国と聞侍りこの浦には今は侍るとなり

くちぬ久しくおもふ神垣の浦のよいはくおふをみするめかまし

御舟よそひ侍し程

漕出てみほのおきつに松の千世やこのつゝふ美えてつまん

廿日あまり駿河府にて御詠

猿ゐるちをとのねぬるくしなりしもかゝらぬ世の名をりおし さは

此外御詠かすく侍りきいまはおもんゆるされさるを無念

ねてや出し万代の往けり御きたてまつるへし 因循御此時

中の侍し

まさるく君のよりみよ婦しのねのたくし月のけしたらき無くとを

見せし何かまく

旅人のうちかけたる駒にのりてなみちやくいそく行まかち
宇津の山まで慰めのをかしく侍りて
さ夜の山こえては跡なくみゆれしにも世の変る思ひのはする
（の那政）
すなはちなる我らうはりなかせて日本紙あつめやすくや神しみらか難
右御時に於て謹進申へきよし御事にて
神にもこれあまつ日本給ひ来るかに照らしてみてれたるに当世
蒔枝の御とよりあひて
春知らぬ花ぞみればはんかなさとやうつせるつく蒔枝のさや
廿二日せとの山寺の所にて

うたゝかしておもひおもはかしかかるなり境ちあき遠きそかのやまとを
かまつのなかありまで
駒とめし竹かゝる田のすまるまたをとるのまりくにのまつりして
さ夜の中山まで山のねのかこみくはるかに斎まきかせ時御詠
小夜おもかけはるかになくて道ゆきむかしさ夜の中山
詠進のうた
をかしきおほかけにすめる旅の夜のゆきのあはれさ夜の中山
遠江は近くありて今の情やゝ入梅あり湖水なる
旅の日の海ちかくみゆく見ゆるこれ久くゆの今のみは原
廿三日地田祠すみ侍るとて

ガラス使用

ゆたかなる宗本のさとの民まてもすゝしき御代にあふそ嬉しき

う浜松もたふとかやうに事

千代経へき高ねをは君にゆつるなるふかふる過ぬる浜松の原

せうなくなとも、ことぬりたる浜の枝もしるとみところありのまゝ事にて

やすみて

舞坂よりの海ておきなる松を見にしふあらゐへつきて君か代をいはふ

うちよする浪にいさゝかはいりくなんとおもひつゝく

何なるいはさねるれのあまたなるもうち残へさてにはまれなりし

廿四日曙にて侍りしに塩見坂こえけれは何となくなりて松原

一里はかりを過し侍る

松原の一むらしくれやすくものねさくもなにさるふゝみに

矢をはに御前箱乃程把にあり侍りしか

あまくさ家来御前代のひかりにひかる物にはくに把矢はきの甲にとゝふせ

廿五日参河と尾張とのさかひ何をとてうるとて

家来ふはまくさ代家のさかひ川なとの国のさかりのみうは

なつかしみて

祈る事ある身は慎みみえさせんちかきあつたの神を仰まて

立寄に侍し海士の在宅をとゝく

あるところは海士にあはる海士のなるの情もあやそのことはかしこ

ぬるわらりとや所に有

富士紀行（尭孝）

冨士紀行（寛文十年）

宮こ人袖をつらねて帰るわかれなき世はちぬまけやとゝめし
おも影の佛とまりまし者
さて見けりのあるて駒をひきとゞめ今やおりて顔をたつねん
御道ある人の佛もうち乗給世（安民）恩徳の恩惟まりたるくえく
侍る
山たつみ跡をもみちのあるゑくぐみなるを残き朱跡のあとまてに
廿六日うつ跡を道き里へ由迄くるま侍に行のあたるおかしく見
ゆ
たとのさとの里へ田を迄てなりて見ゆるなる牛跡につくあるたる
ものまるみて

河舟のさまやは日影けれとやまし三年あらは北くへ毎日紀侍きの清ゆみ
廿七日之る地川と市所にて鐵のおちたる所残見る
立よりて見れは名すみて里也やつくろき助るき鐵の系ゝさふ
うくひきうのは形と市所にて四輪旅乃うちに秒秋色窗小春
御近つきめる風光に備侍るく
里乃名に成くる見ひきの兵系の生ふあきゝ紀すく形春ゝ表東九千
さ見ゆの水を已まひて一切智と清浄無二色をを観し
侍し
久まて二縁ゝうき世の窓はさめる女れとゆかさやなきんゝしらるれ
かよの堂大仏まする

百草の花かずのゝなきのつ遊あゝあなしとふゝろてたかし
野山の木末色付きたるけしきを見て
いろならぬ旅のやつれも見えて色もてる野山のあきの錦
むさの御とほりまてこゝに作御詠二首
紅葉ちりきて深くそめぬこれ秋のおいその杜のつけるさしすみ
ふり出てしくれつゝ過てなにをえよくしぐれいうすれもはなみだを
これはうち老曽の森の御詠和歌作
名にかき老その杜の紅葉かみやさしき人の見る人の紅葉
かゝみ山をうちやりて
なれもみな我とかゞみを作りきみ世にあすみかの山かしきる

御所に還御の時
思ひ来きつるありすがりしはるけきは世の都人子にか来

ガラス使用

○富士紀行（楼翠捨三年生）　藤原雅世

永享四年九月十日公方様富士御覧の為に東国之御下向ありし可供奉之旨兼日より被仰下今暁洛を立侍しに相坂の関をこえ侍るとて

おもひたつけふこそ行旅衣
　きみかみかけく無に相坂のせき

そ眺めよするはれて空もこころよく見え侍りしの、秋のゝみはるくおふみのねは
　そ能まやのそらに霜てらす
為ほと昨日五し

富士紀行（雅世）

枕むすはむすくくすゑ川たひねする
宿借のやとの笘屋のゆふくれを

墨俣川にて

我君の御代もあまねくみちのすゑまても
わたるんや墨また川のせ

呉山のれをち申のもちるかにみわたされて

ちつのあの田るのいねをかる山の
木すゑもみちをそ色付てそある

驂山をみて

老の坂のほりや越へかつるかしみちの海

れほゐちるうきよわたる人

十一日いまはし野といふ所に老曽杜といふありなにかしは
時やかねおひその杜のこと葉を求
なは秋にかゝるものとそおもふ

山乃前とかやいふ所にて

志川のめのかたふ家井を待ねるや
ふるきとは山乃まへにそまさるらん

犬上と申田にて

さをつかやしかきのあのいぬかみの
とこの山風おさまる世に

二本松と申所にて

年ふともの松とまちもあるみちに
帰る年の人をおもひいほし

不破のせきは荒れて松ひさしく名高はせのちえ人ほとは

松ひさし久き名をも残見えて
聞すら住ぬ不破の中山

まさりおもしろく申所にやすらひて侍る事

里人に宿みて知りまやふところに
まさる井すさとのあかきめくら哉

十日朝をこめて垂井のなと申所を過侍るとて

なかれ筆あの井のはしもみちわけて
秋ふかく成る霧そさむけき

赤坂と申所にて秋も暮ぬとなひ侍る人々に詠に
おくれ侍るをえは給侍らしけるに

ゆきほしとめ友さへ跡にのこる枕を
きいしやこゝに赤坂の里

墨俣と申わたりを過き侍るに稲葉の田の面も遠く見渡されて

秋ふかき田面りつくるかりほしそ
ほなみをかけてわたるとよみな

中川と申所にて

都より流れ出けるすゑなれや
七せに渡る中川の水

むまふねのゆきゝやとらやかよふらく
　朝霞えもますさとめなひころ
わたる舟秋あれ思ひすゞし

十三日金佐国松ア浜と申所を朝まだく立侍るに
名残あるもいそきにける旅なれや
月にまつ旅の夜をすくしいと
ならのみやを過るほとりの社頭の井のまへにて
神のましますしいきに地

　よるきの浦に宿を侍りて　一首
なるみかたのおきつ海つらにつゝきて野辺のほとりに秋そゝく人なる
るらんとおほえ侍りて
　朝日さしてなるみかたの人の塩こそをく
　露さへともにひかりとそなる
又おもひつけ侍りける
　道のへの神のめくみに事あれなるみのうら
　ねかひみちくる塩せともかな
星崎と申所にて七日は名月なるに晴て月の名を
えはゐなへしかは
　富士紀行（雅世）

ガラス使用

里ちかきや行くれ方の衣ほして
月も朝より名残を知らるれ
夜さむのさとにしはし休ミ侍りけれは
すゝしさはやとるやしらしと旅衣
夜さむの里をとゝきて出行け
さかひ川を見て
越れとも志ゐ留しそらぬの境川
ほそき流れはなるふかき猶て
参河国八橋にて
やつはしのくもてにわかれし橋にあり
君か世をゑんしいそく旅人
矢はきの里近く過れはかたはらにまゆみのもみちしたる
を見侍りて
道のへのまゆみのかつ枝もみちして
こや矢はきの里としるらん
我君乃おさまれる世はあつきめくみ
ひろぬやはまれ里まきにけ利
今夜の良辰月もことにくもりなく晴て茶をあふし侍める
聊千載之遇一万秋之吉端めてたくおほへ侍けれは
君か代はなほはるかつきれ月乃名も

富士紀行（雅世）

ガラス使用

所から殊にひかりさしそふ

おなしく此比三条亭相公羽林續哥十三首を講し侍るに
題をさくり侍りて

名所山月

そしきえ露しけゝれ秋のあらしに
名のみ二むらの山のはれ月

名所里月

秋ゆふき抜すのあさちふの里人は
月めてゝや住そめけらし

名所浦月

さそしあけほこよひのそらの清見かた
みぬもろこしも浦乃秋の月

名所河月

すゝいつる流れにみなせ坂こえて
ゆく我さとに映すの月かけ

寄月恋

俤とさしおなしみ空の流れともなるこそや
おもひぬるおもふ袖の月かも

十四日はゝれ御勝やとりを立侍るに行ありこれや豊川と
中やうもあへとおほえて一首

する海ぐをいて秋をてナよ川や
何さまは恨のまま残つそかん
衣れておきいはちしに何ちりせんとなるへくる
名川にあかうけや夜のさやけきを
吹払風のつまにしらせる
山中ではあり村ふ鐘のこえはのかにきこえければ
お月つかなこれ山中にかすく鐘の
聖川まに光てぬ声わきこゆる
北その山はいつてみてほどんで覚えて
旅ならもいさ神に祈ん秋の艸れ
北その山は道残ふつねとて
引島所にある国をかしいはまあんとる明なる称せ
遠き人ののまちかくてひくするれ
野邊は秋たきしみやみをれん
はくのほとに高い社やかに社壇あり人に問ひければ八幡宮
弟島井村前にてあんとの旅の目出度さに佛神に恵の傑
本相馬の見えはてく
いさ水底の旅行するまでせ残
情ならん中と一あやかれとそ祈れん
園を所々の佛経次の第日用音のほとも見え上事いかくにさ

富士紀行（雅世）

や所々御跡はるか世にも見えすみしかはいにしへしのはる

民やすく道ひろき世はそれとしらるる

松まとかくしけりにけるを

高師山やかても山はるかにこなたやくみえて

富士は裾におよはぬ名のみ高き山

まつしるへしふもとなるらし

十五日遠江の国塩見坂にて御詠をかき給ひしに

塩見坂の松行く君にひかれ来て

はれに名ある高き富士をあふき見る

又廿日二まつりにも中和田卿の御詠にて国下されけるに

富士を見る時その裾にはなはれて

名にたかのほる二まつかな

十八日は朝の御まつりをと駿河にてこそ給ひしのは瀬名

橋とゝちかもしつ寺

こゝあやはまたのなれりけむと

照りそおいぬするに川浪

を渡りなる川よりへのあはれや

番されて見ゆるあまれかもみは

明日宮あしたこそとも信ちたるは

旅衣あきまくにあはれなくてもの

富士郎の 雅世

もみちを以てしるきといへりけるに
さき坂山やし申所にて

遠くみるふしの高ねにゆきふる比
さきちか山秋をふてこえぬる

十七日此国の府中を立侍るほとにこの安倍川と申にて
わたり侍るにかは

旅衣袖まて波をいとゝ何や
ぬれそてゝしかぬらする哉

菊川やし申所にて

くみてしるなかれの八千代はすゑまても
名にきく川の花も下水

さや乃中山をこえ侍るとて

な残さりにこゝにゆへきしれの秋君乃
めくみてたゝきさや乃中山

こ悔この宿をとや申にて御旅を拝見なるとて

きえしまはまてみしやとこや秋れるに
気来にまの川門れかきくとかなん

かくて駿州藤枝と申所に侍つきあり十八日のたつこの
所をまかり立侍るに岡部の里をすきてやうて宇津山ふ
の侍るほとに所れ名を兵ありておりえ侍里最祖稚徒

卿好み申け昔を参らせ候乃山詠にみえぬてハ不道
と詠侍し事侍るを思ひ出られ侍ると申
　　昔にも成りしをひとつの山
　　越くそ忘れぬはさ此不道
　　さと迄て又こそかれハ浜の浦海
　　とへれまつすほさ乃不道
かくて此国の国府につき侍りて富士をゆふさらに見え侍しかハ
　　富士の裾の霞も見えはしきも
　　君まちねてやいてちき見ん
此国の守護上総介範政に御詠を被下侍し次に
　　此やまりかゝる富士をみまれ玉ふ杯は
　　富士のねすると見え之おもふし
十九日の明方に此所にて又御詠を数首あそはし侍りて
　　富士の嶺の月を眺めてなにしたゝ契あや
　　君かとも千代見そとみえけん
　　見れとなほあかぬ秋の影目新
　　雲にたへる富士のかつらの見え敢
　　朝明けの雲のおもかけ見そめて
　　思ふに何てまくひやはる
富士の山ねにのるかゝ侍る綿ほうし又似侍るよし御

冨士紀行（雅世）

詠みあそはされしのは

雲やそれ雪かいつくふ山のねも
そらみたる跡はつしらす

又御詠をくたされ侍りし時に

都まてはる〳〵来ぬるふし川や
行年なみはおそかはぬ人

廿日清見寺へ渡御り候春志二日拝借寺御詠をお見
し侍りける

気ふかゝる富を木まつの寺海を清見かゝ
松によせくる富そ保の下陰

咲風にあはおさかりしたくめ月は
ふりて猶さえ中なる田子の浦浪

やかて村中に還御あり廿一日早旦に又拝采

富士の裾はゐなる山もしるよなふ
君のとてそいく代へん

又御詠を下されし侍りしかは

数々のをとめの花を都人
富士まうて拝やはふらん

かくて此所を帰ると侍けにはかに私乃宮に一首詠み
をき侍る

富士紀行（雅世）